

ついで泣きければ、

身請の衆は親方がすんでから云々身請の手續はまづ抱主の承諾を得て、廊内總取締なる名主の認可を経たる後、月行事の許にて、大門通過の札を貰ひて廊外に出づるなり、月行事は各町にありて、樓主毎月交代して之に當る。○おつとまかせはもと任せよ引受けたりの意より移れる感詞。○三里は膝の下の外側なる灸穴。○めつたは古くはめた又はむたといへり。擬聲の副詞。○地獄の上の一足飛び。古き諺にて「毛吹草」に見ゆ。「新可笑記」にも「之に乗れば地獄の上の一足飛び、命がけの働なれば、随分心強き人も魂は浮世になかりき。」

●一旦は金の出所を疑ひながら、大和から持つて來た敷金との間に合せの辯解を聞いて、少しも疑はず、一代の外聞、暇乞も譯ようしてと、何心なく勇み立ついちらしさ、わざとけなさ、愛すべく憐むべし。

梅川はあと震ひ出し、聲も涙にわなくと、「それ見さんせ、常々いひしはこゝの事なせに命が惜しいぞ、二人死ぬれば本望。今とても安い事、分別すゑて下んせのう。」

「ヤレ命生きようと思つて、此大事がなるものか。生きらるゝだけ添はるゝだけ、高は死ぬると覺悟しや。」

「ア、さうぢや、生きらるゝだけ此世で添はる。今にも人が來るため、こゝへ隠れて御座んせ」と屏風の陰に押入れ、「ア、わしが大事の守りを、内の簞笥において來た、これがほしい」と言ひければ、「ハテかゝる悪事を仕出して、いかなる守りの力にも此科はのがれうか。とかく死に身と



合點して我はそなたの回向せん。そなたは此忠兵衛が回向を頼むと屏風の上顔を出せば「ハア、悲しやいまましい、ちやつと措いて下さんせ、いやな物に能う似た」と屏風にひしと抱きつき、むせ返りてぞ歎きける。越後主從立ち歸り、「サアどこもかも埒明いた。お出の勝手近ければ西口へ札が廻つた」といへども夫婦はわなわなと「さらば〜」も震ひ聲。「おさむさうなが酒はいの。」酒も咽を通りませぬ。「めでたいと申さうか、お名残惜しいと申さうか、千日いうても盡きぬ事。」其千日が迷惑といふつげ鳥に別れ行く榮耀榮華も人の金果は砂

場を打過て、あとは野となれ大和路や、足にまかせて三重

西口は西の大門口なり、佐渡屋町は西口に接近するを以て、出勝手よし。その番所に門鑑を回附したるを札が廻つたといふなり。○千日は昔の仕置場、今の千日前の地。この識語「博多小女郎浪枕」の「七人一度に身請けとは聞きも及ばぬ大々盡、お一人々々顔に書付はりつけたい、ノウはりつけと聞くもぞそがみややく。お手柄のお名が顯れう、顯れるは尙氣がかり、何にもいふな」と對照すべし。砂場は西口の南の町の名、人の金を砂にするの意をかけたるならん。○いふつげ鳥實はゆふつけ(木綿附)ごりにて鶏をいふ、濁りて讀むは夕告と誤りたるに因る。○あとは野となれ、大和路は「あとは野となれ山となれ」の諺語による。

●忠兵衛に實を明かされ、震ひわななきながらも、くよくよ怨みがま



しき愚痴をこぼさず、直に命を投げだして男の決心を待つ、けなげな  
りとやいはん。さて一旦覺悟は定めつゝも、生きらるゝだけ添はるゝ  
だけは「といふ男の言葉に「ア、さうぢや」との心機一轉は、人情の自然  
にして、殊に天とも地とも男一人をたよりに、何事も打任せたる無邪  
氣の梅川を描出して躍然たらしむ。屏風の上の顔を見て獄門首を連  
想するは「柱曆」の影法師と趣を同じくし、中巻の拳酒は「重井筒」の火廻  
し、下巻孫右衛門の出會の所は「柱曆」の岡崎の塲と同型なること、近松  
之研究に青々園氏の注意ありし如し。

### 下の巻

梅川 相合かご

「翠帳紅閨に枕ならべし閨のうち馴れし唄ふすまの

よすががらも四つ門の跡夢もなし。さるにても我夫の秋  
より先に必ずと、あだし情の世を頼み、人を頼みの綱切  
れて夜半の中戸も引替へて、人目の關にせかれ行く。昨  
日のまゝの鬢つきや、髪の鬢目のほつれたを、縮げて進  
じよと櫛を取る手さへ涙に凍えつき、冷えたる足を太  
腿に、相合火燧相輿の駕籠の息杖生きてまだつゞく命  
が不思議ぞと二人が涙翻れ口明けぬ間は暫しとて、駕  
籠の簾をあけてさへ、膝組みかはす駕籠の内、狭き局の  
ありし夜の逢瀬に似たは似たれども、炭の埋火いつし  
かに、朝の霜と置きかへて、夜半の嵐に呼ばれては、應ふ



る野邊の禿松、過ぎし其夜が思はれて、いと涙の種な  
らん。何くどくと思ふぞや、これぞ一蓮托生と慰めつ  
又慰みに、比翼烟管の薄烟霧も絶えど、晴れ渡り、麥の  
葉生に風荒れて、朝出の賤や火を貰ふ野守が見る目恥  
しと、駕籠を立てさせて暇をやる、あたひの露の命さへ  
惜しからぬ身は惜しからず、猶も惜まぬ徒歩はだし、惜  
むは名残ばかりぞや。

こゝに謠とあるは謠曲の班女唄とあるは「松の落葉(寶永七年板)に見  
ゆる中村七三郎所作事の「稻荷塚四ツ門の唱歌なり。四ツ門は班女に  
基きたる作なれば、並へ舉げて對照に便すべし。

班女

翠帳紅圍に、枕並ぶる床の上、なれい衾の夜すがらも、同穴の跡  
夢もなし、よしそれも同じ世の命のみをさりとも、いつまで草の  
露のまも、比翼連理のかたらひ、其驪山宮のさゝめ言も、たれか聞傳  
へて今の世まで洩すらん、さるにても、我夫の秋より先に必ずと、ゆ  
ふへの數はかさなれど、あだし言葉の人心頼めて、こぬ夜は積れど  
も、欄干に立ちつくして、そなたの空よ眺むれば、夕暮の秋風、あらし  
山おろし野分も、あの松をこそはおとづるれ、我待つ人よりの、音づ  
れをいつか聞かまし。シテ、せめてもの形見の扇手にふれて、地風の  
たよりと思へども、夏もはや杉の窓の秋風冷かに吹落ちて、團雪の  
扇も雪なれば、名をきくもすさまじくて、秋風恨あり、よしや思へば  
是もげに、逢ふは別れなるべし、其報いなれば、今更、世をも人をも恨



むまじ、只おもはれぬ身の程を思ひついで、獨居の班女が聞ぞよ  
びしき。

稻荷塚四ツ門

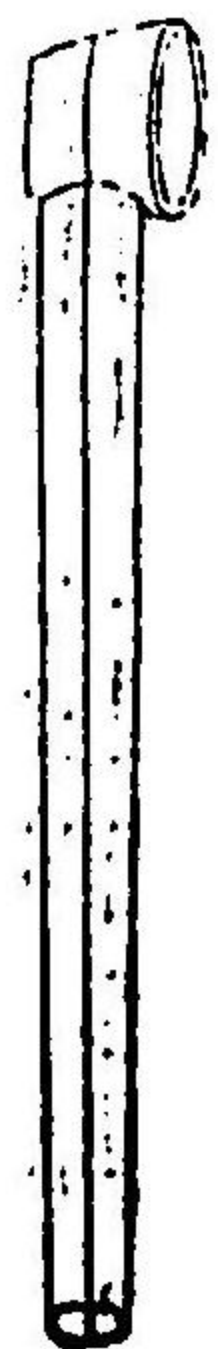
二上り翠帳紅圍に枕並ぶる床の内なれしねまきの夜すがらも四ツ  
門の跡夢もなしさるにても我夫の秋よりさきに必ずとわたい言  
葉の人心そなたの空よと詠むれど、それぞといひし人もなし夏も  
はや杉窓の秋風冷かに吹きおちて、よしや思へばこれとても逢ふ  
はわかれなるべし、世をも人も恨むまじ、只身のほどを思ひついで  
けて我一人丸寐の床こそさびしけれ。

駕籠の籠をあけてさへ膝くみかはす駕籠の内一句の中に駕籠の語  
重複して耳ざはりなり。○炭の理火いつしかに云々理火の白く灰が  
ちになるを曉の霜にかけていふ。○禿松は笠の如き形の松、それを「カ

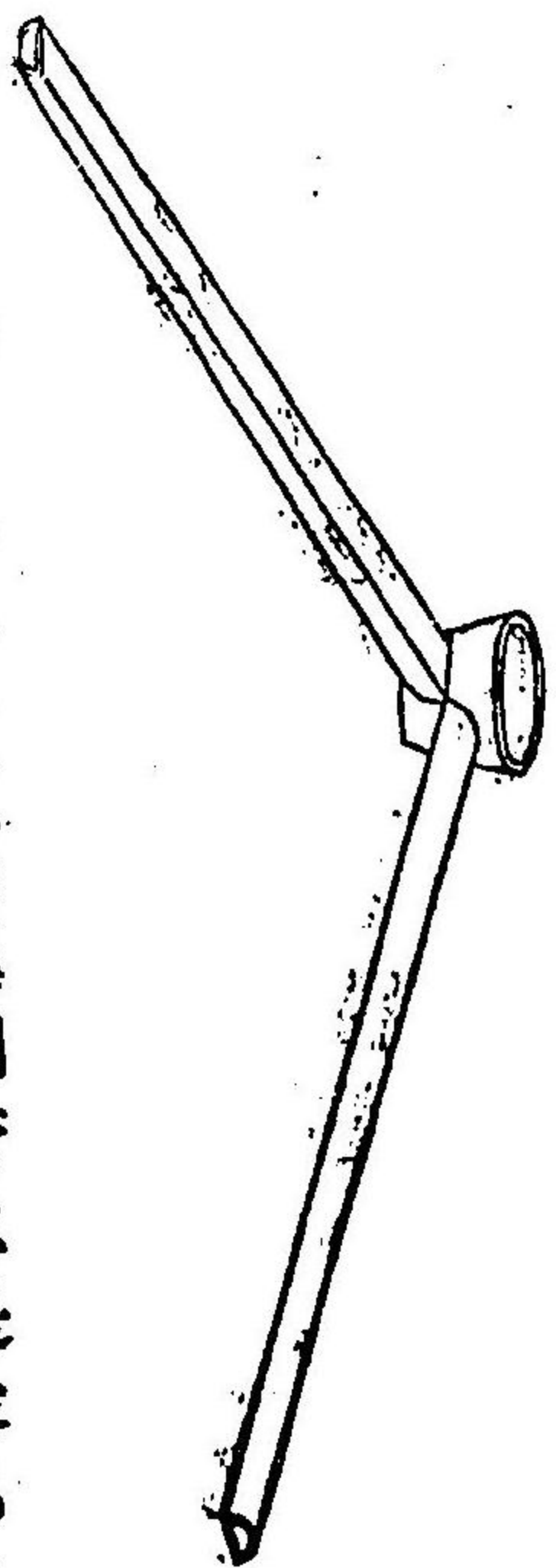
襪によそふすべてこの邊途上關目の景を取つて、青樓洞房の情に比  
し、錯綜の妙を極む。○中字九行本慰みつつ又慰みに、又比翼烟管の薄烟  
さへもたえいふとある皆わろし。

○太日本史料慶長十年の條に、古烟管圖あり。

元祿頃のものといふ傳ふ



右の烟管を開きたる處



名稱は見えねど比翼烟管は是なること疑なし。

○霧もたえいづ晴れ渡り、葉の風に云々、冬の朝景色物哀れにさび  
しげなり。○値の露の命、纏頭祝儀の金を露といふにより、駕代と露命



とにかけし也。

終に著馴れぬ綿帽子、わしが顔よりこなさんの肌に之をと、風防ぐびらり帽子の紫や、色で逢ひしははや昔、今日には眞身の女、夫合頼まば願ひかのえ申、庚申堂よと伏し拜み、振り返り見る勝曼の愛染様に愛敬を祈る芝居の子供衆や、道頓堀のいろくや、馴れし廓のそれぞとは、紋で覚えし提灯の中にはかなや槌屋内、此木瓜に打添て、わたしが紋の松皮の松の千歳を祈りしに、定めぬ契提灯の消ゆる命のゆふべには、此紋つけて我中の經帷子と觀念し、冥途の道をこのやうに手をひかうぞや引

かれうと、又取りかはし泣く涙袖の氷と閉ぢあへり。

びらり帽子、藻鹽百人一首千尋海、明和六年刊寛政四年補刻といふ書に、〇びらり帽子の事、是は慶長の頃より彌茶といへる女の工み出したる物にて、前かどは聚樂帽子といひたる物なり、淺黄ちりめんにてこしらへ用ゆ。…綿帽子の事、びらり帽子とはひとへにて花やかならぬ故ふたへのわたにしてかくるなり、是は天和の頃よりはじまるといへり、畢竟はびらりぼうしの轉じたる物とあり、嬉遊笑覽二の上に「吉原徒然艸に澤之丞といふ野郎、帽子の左右を垂てかつぎけり、小娘踊子などの帽子の最初なり、元祿の初の頃よりひろまりけり、類柑子に、辰之助が猫は焦尾琴のしらべに踊り、澤之丞が帽子は菊の宴の紫に匂ひて二度の敷入をかざらずといふことなし、云々、八文舎が歌舞妓故實に澤之丞帽子、元祿の初め澤之丞といふ女形かつぎ初めたり、



左右に鉛のおもり付たるよし、依ておもり帽子といふ。又云、歌舞妓にて用うる紫帽子はそのかみ鳥居庄七といふ女方始む、是ひらりとさげてきせたるよし。元祿の頃、加茂川のしほ、水木辰之助、工夫して縮緬にて風流にこしらへ、色は紫に定めたりと云へり。ひらり帽子はおもり帽子の如く、左右の端に鉛のおもりを入れずして、ひらくと翻り易きより此名あり。女殺油地獄「上之巻」に、小菊は岡へ一飛びに、ひらり帽子の深々と眉はかくせど、「卯月の潤色」中巻に、「お龜様も打揃ひ、ひらり帽子に加賀菅笠の匂あり、俳優より花柳社會に移りし流行と見ゆ。色は紫を受けて、情夫の義を利かす。○勝曼院は新清水寺の北、岸坂の上にある。本尊愛染明王にして、當時愛敬商賈の者の流行神と見えて、及は氷の朔日の中之巻にも、小かんの勝曼まゐりして、提灯奉納の事あり。庚申堂は天王寺の南にあり、諸國の庚申の本地なり。難波

丸網目」として有名なり。宵庚申の道行に、卯月五日の宵庚申死なば一所と契りたる其一言はかのえさる」とある。こゝと同一の修辭なり。○道頓堀のいろくは道頓堀の芝居者より奉納したるいろくの品をいふ。○樋屋は梅川の抱主。木瓜は忠兵衛の紋所なるべく、發端の五所紋遂に無用の泛辭とならず。松皮は松皮菱。誰が關するぬ道なれど、問ひく行けばはかゆかず。けさの姿を其なりに、素足に雪駄しみづけば、空に雲の一曇り、霰まじりに、吹く木の葉、ひらり平野に行きかゝり、こゝは知る人多ければ、「こちへ」と袖おほひ、里の裏道、畦道をすぢりもぢりて、藤井寺あれくあれを見や、



どこの田舎も戀の世や、背門に菜を摘む十七八が、  
に立つたは忍びの夫かえ、野風身の毒、こちはひらしや  
んせえよその睦言妬ましく、それ覺えてか、いつの事彼  
の初雪の朝ごみに、ねまきながらに送られし大門口の  
薄雪も、今降る雪もかはらねど、變りはてたる身の行く  
へ、我ゆゑ染めていとほしや、元の白地を淺黄より、戀は  
譽田の八幡に、起請誓紙の筆の罰、そなたをよけてと泣  
く涙、嗚暫し人目の、や許しはあれど、申しこれのうさり  
とては、わしが身とてもまゝにはと、末は涙にはてしな  
く、延の三つ折絞るにも、裾にやつるゝ小笹原霜の枯野

の薄原茫々さらくさつと鳴つたは、我を追手の尋ぬ  
るよと、掩ひかさなり影かくし、ふりさけ見れば人には  
あらで、妻戀ひ鳥の羽音におちる身となるは、いかなる  
罪の報いぞと、くどき歎きて行く姿泣くか笑ふか、富田  
林の群鴉せめて一夜の心なく、咎むる聲の高間山、あの  
葛城の神ならで晝の通路つゝましく、身を忍ぶ道戀の  
道、我から狭き浮世の道、竹の内峠袖ぬれて、岩屋越とて  
石道や、野越え山暮れ里々越えて行くは、戀ゆゑ三重

平野は大阪より二里許なる東成郡の小都會。○すぢりもぢりは曲り  
くねりて歩むを、藤葛の屈曲するにかく、藤井寺は南河内郡長野村の



名利。○門に立つたの唄は、「松の葉」元祿十六年板端手組の中の「かどに立ちたは八もじさまか夜風身の毒うちござれを聊かかへて用ひたり。○朝ごみ嬉遊笑覧九の下朝込夜の未明に來て廓門の開くを待て入るをいふ。○元の白地を淺黄より云々色にそみて元の白地にかへるべくもあらねば寧ろ色濃く染めんぞとなり下の關節の淺黄はざつとしたいやよな望が御座んすござんするそこせいゝ小雀山雀四十雀唐松たけの幾千代も戀にうき茶の葉の色になど淺黄の色薄きを思みたる唄多し。「博多小女郎浪枕」の道行にも「今おちぶれの身と知らばざつと淺黄に染めうもの裏表ない心から偽紫の色わるう」の句あり豊田の八幡は南河内郡古市村にあり。○起請日本紀に誓約をウケヒと訓めるよりウケを立つの義として此語起りぬといふ。○暫し人目の唄いまだ求め得ず。○ふりさけ見るは遠く仰ぎ見るこ

と。○落人に風聲鶴唳はめづらしからねど殊に妻戀鳥を擇びたるは色氣ありて佳し。○せめて一夜の心なくはせめて一夜ばかりは見許さんの心もなく。○葛城の神云々葛城の神一言主神容貌醜きを恥ぢて晝は出でず夜のみ立ち出で、久米の岩橋を作りきと云ふ故事。○富田林は南河内郡の小都會高間(高天)山は葛城山脈中の高峰金剛山をいふ。○竹内峠は河内石川郡の界にて高田に通ず岩屋越は石川郡界にして三里餘にて御所に達す。  
清める世の掟正しく畿内近國に追手かゝり中にも大和は生國として十七軒の飛脚問屋或は巡禮古着買節季候に化けて家々を覗きの機關、飴賣と小兒に飴をねぶらせて口をむしるや毘の鳥網代の魚の如くにて遁れ



がたなき命なり。無慚やな忠兵衛我さへ浮世忍ぶ身に  
梅川が風俗の人の目だつを包みかね、借駕籠に日を送  
り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜を明かし二十  
日あまりに四十兩つかひ果して二分残る鐘も霞むや  
初瀬山よそに見すて、親里の新口村に著きけるがこ  
れお梅こゝは我生れ在所二十歳まで育つて覚えしが、  
師走のはてに此の如く、諸勸進諸商人、春とてもない事、  
あれあそこにも立つて居る野はづれにも二三人胸騒  
ぎもして来た四五町往けばほんの親孫右衛門の家な  
れども不通といひ繼母なり。この葦草は忠三郎とて下

作あてた小百姓腹の中から馴染み頼もしい男まづこ  
こへと打連れ、忠三郎宿にか、久しうお目にかゝらぬと、  
つつと入れれば、鼻とおほしくたれで御座るぞ。これのは  
今朝から庄屋殿へ詰められ、今は留守で御座るといふ。  
「ふ、忠三殿におか様はなかつたが、此方はどれでばし  
御座るぞ。」ア、わしも三年あとに、この内へ嫁入して、  
前方の知る人はどれがどうも知りませぬ。ヤアほんに  
皆様はもし大阪では御座らぬか、これの親方孫右衛門  
様の繼子忠兵衛殿と申すが、大阪へ養子に往て、けいせ  
ん買うて人の金を偷み、そのけいせん連れて走られた



というて代官殿より御詮議孫右衛門様は疾うに親子の久離を切り構はぬとはいひながら眞實の親子なれば年よつての氣苦勞これのは馴染の事なればもし此あたりうるたへて見つけられてはいとしい事と内外へ氣をつけらるゝ庄屋殿から呼びに来る寄合の印判の節季師走に此在所はけいせん事で養えかへるのううたてのおけいせん殿やと遠慮もなくぞ語りける忠兵衛はつと思ひいかにもく大阪でも其取沙汰我等は夫婦づれで年籠りに參宮の志なつかしさに寄りましたちよつと呼うで來て下され立ちながら逢うて歸

りたい。大阪者といはずに頼みます」といひければ「さてはいかうお急ぎか往て呼うで來ませう。さりながら鎌田村のお道場へ京のお寺のお下り、毎日のおさんだん先からすぐにお道場へ參られたもいざ汁の下さしくべて下され」と禱がけしてはしり行く。

節季候は歳末に乞食の類の二人或は四人笠を被ぶり拍子どりて季節候云々と唱へ踊りて米錢を乞ふ者覗きのからくり家内の様子をのぞき窺ふにかけていふ。○小兒に飴をねぶらせて云々甘言を以て誘ひ小兒の口より手がへりを引き出さんとするをいふむしるといふより毘の鳥と承けたる手際いと巧なり。綱代は築の一種。○三輪は式上郡(今磯城郡)の小市。初瀬山は三輪山の北に在り。○二分残るより



鐘も霞むやと轉じて受けたる狡獪の俳諧手段老練といふべし鐘霞むも俳語なり。○腹の中から馴染は極めて幼き時よりの馴染。○これはこちの人などいふ類。○人の妻をおか様といふはお方様の轉訛なるべし。○けいせんは傾城の訛語。夕霧阿波鳴渡中の卷下女の詞にも奥様々々けいせんが参りましたとあり。○父子兄弟の縁を絶つを久離(舊里か)切るといふ。○年越まわりとて伊勢に大晦日に参詣する風習あり。○の年籠もそれならん。○鎌田村は葛上郡(今南葛城郡)にあり。五所の附近なり。新口村よりは距離稍遠きに失するものゝことし。道場は寺院なり。○毎日のおさんだん。博文館本、参談の字をあてたれど正しくは讚嘆なるべく、如來の名號功德を稱嘆して極樂往生を願ふを讚嘆門と稱す。こゝにては説教といふ程の意。いざ汗の下さしくべて下されはいざ知らずにかく。此一句にて其時其場の光景を讚

者の眼中に描き出さしむ。

跡の門口梅川がはたと鎖して懸金かけ「これはほんの敵の中大事ないか」といひければ「忠三郎といふ者は百姓に稀な男氣をもつたもの、頼んで一夜逗留し死ぬるとも此處故郷の土に身をなして、生みの母の墓所一所に埋まれ嫁姑の未來の對面させたい」と、目もろろくとなりければ「それは嬉れしう御座んせう。さりながらわたしが母は京の六條、定めし此の間詮議に人がいきつらん、日頃が眩暈もちなれば、どうならんしたこともやら、ま一度京の母様にも一目逢うて死にたいぞ。」「チ、



道理とも、我もそなたのおふくろに、壻ぢやというて逢  
ひたいと人目なければ抱きあひ、涙の雨の横時雨袖に  
餘りて窓をうつハア、降つて来たさうな」と西受けの  
竹櫃子、反故障子を細目に明けて、見るや野風の鳥道、う  
しろしぶきに降る雨は、かたげて急ぐ阿彌陀傘道場ま  
あり打連れしは、あれ皆在所の知つた衆。さきなは樽井  
端の助三郎、これも在所の口利き、あのお婆は荷持瘤の  
傳が婆、ア、いかい茶飲みぢやがの。そこへ見える剃り  
下げは、昔は大貧乏、年貢につまつて娘を京の島原へ賣  
り、大盡に請け出され、奥様にそなはり、壻の蔭で田も五

町藏も二ヶ所の分限じや、同じ傾城請ける身が、我れは  
そなたのおふくろに、憂き目をかける口惜しい。あの爺  
は、弦掛の藤次兵衛、八十八で一升の飯残さぬ。今年はち  
やうど九十五。そこへ来た坊主は、鍼立の道庵、あいつが  
針で母者人を立て殺した。思へば母の敵ぢや」と憂きに  
つけての恨み言、あれ〜あれへ見えるが親仁様。「あの  
の緞の肩衣が孫右衛門様か、ほんに目元が似たはいの。」  
「それ程能う似た親と子の、詞をもかはされぬ、これも親  
の御罰ぞや。お年もよる足元も弱つた、今生のお暇と手  
を合はすれば、梅川は見はじめの、見をさめ、わたしは嫁



で御座んする、夫婦は今をも知らぬ命、百年の御壽命過ぎて後、未來でお目にかゝりましよ」と口のうちに獨語。諸共に手を合はせ、咽び入りてぞ歎きける。

ま一度は今一度。●涙の雨を寫すと共に、窓を打つ横時雨を喚起したる此翁獨得の筆法、敏捷極りなし。○竹櫺子は竹格子の窓。○阿彌陀の後光の様に似たるより、阿彌陀がさといへり、阿彌陀に被るといふも此意なり。○活字本いづれも傾げて急ぐ阿彌陀笠と字をあてたれどかたげるは肩にかつぐをいふ。●郷里の舊知を前後に點出し來りて、懷舊感慨、怨嗟、悔恨の標的とし、忠兵衛が眼中に在る行人を以て内より外を描くは、やがて外を以て内を現す所以。○これも在所の口利きのこれもは忠三郎に對していふ。荷持瘤は荷をかつぐため生せし

瘤をいふ、池西言水の荷持瘤ゆめ路をさするやどのくれといふ句、江戸新道にあり、剃下げは三日月形に後方にそりさげたる頭、弦掛は綿打の弦を製する者といふ意か。○分限じや、中字九行本濁點なし、分限者の意に解せしならん、濁點あるものも、尙ぢやの意とせずして、(者)と見る方まさりぬべし。鍼立の道庵の上なる坊主はの三字、博文館本無し。○母者人は母ぢや、人にて母なる人、母である人の義。○緞の肩衣、門徒の佛事寺まうでに肩衣を著くること、今なほ然り、緞は麻布の一種。

●梅川が孫右衛門を見ての言葉、これぞと指していふべき特點もなければ、やさしき女性の情味頗る饒かなり。

孫右衛門は老足の休みく門を過ぎ、野口の溝の水氷すべるとまる高足駄、鼻緒は切れて横様に泥田へか



はと轉けこんだり「ハア悲しや」と忠兵衛もがけども騒  
げども身を顧みて出もやらず梅川あわて走りいでた  
き起して裾絞り「どこも痛みはしませぬか。お年寄のお  
いとしや、お足もすゝぎ、鼻緒もすげてあげませう。少  
も御遠慮なさるゝな」と腰膝撫で、勞はれば孫右衛門  
起き上り「どなたやら有難い。お蔭で怪我も致さぬ。若  
上藤のおやさしい年寄と思召し、嫁子もならぬ介抱寺  
道場へまゐつても、是こゝの一心が邪見では參らぬも  
同前。あなたがほんの後生願ひ。まう手を洗うて下され。  
幸ひこゝに藁もある、鼻緒はわしがすげましょ」とふと

ころの塵紙を取らせば、梅川は「好い紙が御座んする。紙  
捻ひねつて上げませう」と延ひきさきし其手元、孫右衛  
門不思議さうに「まづこなたはこゝらに見知らぬお人  
ぢやが、どなたなれば此様にねんごろにして下さると  
顔をつれづながむれば、梅川いとむなづばらしく、  
「ア、我等は旅の者。わたしが舅のおやぢ様、ちやうどお  
前の年配で、恰好もそのまゝ、外へする奉公とはさらさ  
ら以て思はれず、お年よつた舅御の臥し病みのだきか  
ゝへ、みやづかへは嫁の役、御用に立てばわたしもなん  
ぼるか嬉しいもの、つれあひは猶親御の事、飛び立つや



うにもある筈。此紙と此紙とかへてわたしに申受け、つれあひの肌につけさせ、父御に似たるおやぢ様の形見にさせたる御座んす」と塵紙袖に押包む涙ぞ色にいでにける。言葉のはづれに孫右衛門、つくづくと推量し、さすが恩愛すてがたく老の涙にくれけるが、ム、此方の身しんに此爺このぢいが似たというての孝行かうかうか、嬉しいうちに腹はらが立つ、年長けた倅せがれを子細こまかあつて久離切り、大阪へ養子やしに遣はせしに、根性に魔まがさいて、大分人の金をあやまり、揚句あげくに所ところをはしつて、此在所このところまで詮議せんぎの最中さいちゆう誰故たれゆゑなれば嫁御故よめご近比ちかひ愚痴ぐちな事ことなれども、世のたとへにいふ通

り、盗みする子は憎からで繩かくる人が怨しいとは此事よ。久離切つた親子なれば、善いにつけ悪いにつけ、構はぬ事とはいひながら、大阪へ養子に往て、利發で器用で身を持つて身代も仕上げた、あのやうな子を勘當した孫右衛門はたはけ者、あほう者といはれても、その嬉しさはどうかあらう、今にも探したされ、繩かゝつて引かゝる、時、よい時に勘當して、孫右衛門は出来した、仕合せぢやと褒められても、その悲しさはどうかあらう。今から思ひすごされて、一日も先に往生させて下されと拜み願ふは、今參る如來様御開山佛にうそはつかぬぞ」と、土



にどうど平伏して、聲をはかりに泣きければ、梅川も聲をあげ、忠兵衛は障子より手を出し伏し拜み、身をもみ歎き沈みしはことわりとこそ聞えけれ。

水氷は水とも氷ともつかぬぬかるみをいふ造語なるべく、すべるとまるの句、簡潔にして情を盡せり。●孫右衛門の顛倒を縁として梅川を屋内より引き出し、忠兵衛父子を障子一重に隔て、再會せしめたる趣向わざとらしからずして趣深し。○顔をづれ。○はづら。い。○(熱々)むなづ。ばら。しくは胸つまるかやうにて。○年配は年延にて年の程、恰好はなりかたちみやづかへは宮仕の義より轉じて長上に仕ふる意に用ひらる。なんぼうは何程言葉のはづれは言葉の端々。○盗みする。子云々の諺、早う曾我物語に見ゆ。○聲をはかりには聲の限りなり。

●障子より手を出して伏し拜むが如ききはどき趣向は、近松の好んで用ふる所なること、曾根崎心中の椽の下屋の註釋に例を挙げたる如し。

なほも涙をおしのごひ、のう血の筋は悲しい。中のよい他人より、久離切つた親子の親みは世のならひ、盗み騙りをせうよりも、なぜ前方に内證で、かうくした傾城にかうした譯の金が入ると、ひそかに便宜もするならば親は泣き寄り、親子なり、殊に母もない、倅、隠居の田地を賣つても首繩はつけさせまい。今では世間廣うなり、養子の母に難義をかけ、人に損をかけ、苦勞をかけ、孫右衛門が子で候ふとて、引込んで置かれうか、一夜の宿も



貸されうか。皆あいつが心から、其身も狭い苦しむを、嫁御にまで憂き目を見せ、廣い世界を逃げかくれ、知音ちかづき親子にも、隠れるやうに身を持ちなしろく、死にもせぬやうに、此親は生みつけぬ。憎い奴とは思へども、かはゆる御座る」とばかりにて、わつと消え入り泣き沈む。分けたる血筋ぞあはれなる。涙の際に巾著より銀子一枚取り出し、これは難波の御坊の御普請の奉加銀、今こゝに有り合せた嫁と存じてやるでもなし、只今のお禮のため。此邊にぶらついては、よう似たとて捕へるぞ、つれあひは尙以て、是を路銀に御所海道へかゝつ

て、一足も早うのかつしやれ。こなたの良人にも詞こそかはさずとも、ちよつと顔でも見たいが、いや／＼それでは世間が立たぬ。どうぞ無事を吉左右を」と涙ながら二足三足行きてはかへり、「なんと逢うても大事あるまいかい。」「なんの人が知りませう、逢うてやつて下さんせ。」「ア、大阪の義理は缺かれまい。どうぞして逆様な回向させなと懇ろに頼みまする」とむせかへり、振り返り／＼泣く／＼別れゆく跡に、夫婦はわつと伏しまろび、人目も忘れ泣き居たる親子の中こそはかなけれ。

「親は泣き寄り、他人は食ひ寄り」といふ諺あり。○今では世間廣うなり。



は事の表沙汰になるをいふ、狭い苦は世界狭く身の置所なき意。○知音は親友、列子の「伯牙善鼓琴、鍾子期善聽」の故事に基く。○分けたる血筋は血を分けたる親子の筋、建築工事を普請といふは、もと僧徒の普く檀越に請ひて金品を集め、造營の事に當てしより出づ、難波御坊は東本願寺の御堂、○御所又五所ともは南葛城郡の都會にて、海岸ならぬをも海道といふは無理類推の一例なり。○懇ろに頼みますはくれぐれも頼むぞよの意。

●嫁と存じてやるでもなし、只今のお禮のためといへる、名分を偏重したる元祿時代の道徳は、往々此の如き矛盾に富む、今日普通の見物が芝居を看て、昔の人の義理堅きを嘆賞する(其眞味は了解せぬまでも)は、殆ど此類の言語ならざるなし、まして同時代の見物には多大の同情を惹きしなるべし。

一旦は面會せんかと引き返しながら、大阪の義理を思ひて思ひとまり、泣く泣く別るゝ處、義理と人情との苦闘、千萬無量の煩悶を僅々數語に揮灑して、哀情長へに盡さず、彼の「戀飛脚」が孫右衛門に目かくしして忠兵衛の手を握らしめたるが如きは、言語道斷沙汰の限りといふべし。

忠三郎が女房雨にぬれて立ち歸り、待ち遠に御座りませう、こちらの人は庄屋殿からすぐに道場へまゐられ、それ故逢ひも致さず、まう雨も晴れかゝる、おつつけ、今に戻られうといふ所へ忠三郎息をきつて驅け來り、これはいく忠兵衛様、親父さまの咄で段々を聞いて來た、こなたの事で此在所は大阪から犬が入り、代官殿から詮



議ある劔の中へ晝日中運の盡きたお人ぢや、こなたの  
ふりを見つけたやら、俄に在所家竝のかたはしから屋  
探し、親父様を今探す、是からわしが家の番親父様はい  
としや、早う脱かしてくれよとて、狂亂になつてぢや、鱧  
の口とは只今、サア、裏道から御所海道山へかゝつ  
て退かつしやれ」といへば夫婦はうるたゆる女房は譯  
知らず、わしも一所にのきまじよか、「あほらしい」と引  
きのけて、夫婦に古蓑古笠や雨のあしべも亂るゝ心死  
しても忘れぬこのなさけ、深く忍びて出にけり。忠三郎  
まづ嬉しいと息をついだる處に、庄屋年寄先に立ち、代

官所の捕手の衆、忠三郎が門口背門口二手になり、どや  
どやと込み入つて、蕙をまくり、簀子を破り、からと、米櫃、  
灰俵、うちかへしてぞ探しける。土間かけて二十疊にも  
足らぬ小家、いづくに隠れんやうもなし。此家は別條な  
し、野道を探せ」といひすて、茶園畑のあひくをかり  
立て、こそ三重通りけれ。

段々を聞いては段々の様子をなり、探偵を犬といふはもと盗賊の隠  
語、親父様を今探すは親父様の所をの意、鱧の口は極めて危険なる  
事のたとへ、虎の尾を踏み、毒蛇の口を遁れなど、共に軍記類に多く  
見ゆ。〇わしも一所にのきまじよか、百忙中の一閑筆、例の癖ながら  
つも程くごからずしてよし。〇雨のあしべは雨の脚に夫婦の足元を



かく。○から。とは長持の類仙臺にては車のつきたる長持を今もかく  
いへり。もと唐櫃の轉訛舞の本信田に石のからうとの語あり。からび  
つ。からうと。からの。の變遷を見るべし。

親孫右衛門徒跳にて「どうぢやく」忠三郎善か悪か聞  
きたい。「ア、よい、氣遣ひない、夫婦ながら何事な  
う甘々と落しました。」「ハア有難い忝ない、如來のお蔭  
すぐに又道場へ参りて御開山へ御禮申さう、のう嬉し  
や有難や」と二人打連れ行く處に「龜屋忠兵衛、榎屋の梅  
川、たつた今捕られた」と北在所に人だかり、程なく捕手  
の役人、夫婦を搦め引き来る、孫右衛門は氣を失ひ、息も  
絶ゆるばかりなる風情を見れば、梅川が夫も我も繩目

の科、まなこも眩み泣き洗む。忠兵衛大聲あげ、身に罪あ  
れば覺悟の上殺さるゝは是非もなし、御回向頼み奉る、  
親のなげきが目にかゝり、未來の障りこれ一つ、面を包  
んで下され、おなさけ也」と泣きければ、腰の手拭引き絞  
り、めんないちどり百千鳥泣くは梅川、川千鳥、水の流れ  
と身の行くへ、戀に洗みし浮名のみ、浪花に遺し留まり  
し。

めんないちごりは目なし、どち友ごちのどちより轉じたる言葉なり。  
一休の「水鏡」に「めなしごち」聲についてまします。○水の流れと  
人の行くへは知れぬといふ諺を用ふ。○千鳥、梅川、水の流れ、洗みし浮  
名、縁語づくめの文飾例の如し、悲哀を表する所に、弄語をなすの不利



は人の知る所なれど、こは我國の謠物の歴史上自然の筋道なれば、あながち巢林子のみを酷評すべきにあらず。

●さきには父子相見んと欲して、浮世の義理に相見るを得ず、今は相見ざらんとして、縲紲の中に相見る、眞にこれ寸步黯黒、一旦二人を落し一息つかせて、まもなく縛に就かせたるは、波瀾ありて世話物の常套におちす。

逍遙氏が此曲の世話物中の傑作たる所以を説いて、只一個の敵役をだに點出せずして、此好悲劇を成したること、男女の愛と親子の愛とを上下に振り分けて、其至極を寫しだしたること、上中下三段に風景の全く變せること等を數へられたる、何人も異議なかるべし。

忠兵衛  
川 冥途の飛脚終

### つれづれ草解題

此曲は巢林子が初期の筆力文體を觀察すべき恰好の資料にして、此書刊行の延寶九年は、翁が二十九歳の時に當る。侍従が丑時詣の一節に、謠曲金輪の文辭を襲用したる他は、全篇概ね兼好がつれづれ草の辭句を釘鉋補綴し、句々皆來歴あらざるなく、挿話は勿論、曲中の端役に至るまで、彼の隨筆に見えたる人名を假り用ひて、原書に依據するを、うるさきまで忠實なり。趣向は極めて單純にして、變化に乏しく、文章はた古淨瑠璃の様式を墨守し、「扱も其後」の冒頭に、「感せぬ者こそなかりひれの結尾」是は扱置き、「既に其日にもなりしかば」それよりも何をむてなど例の舞、説經の口調を脱せず、後年の巢林子が筆とば雲泥の差異にて、前後別人の觀あれども、一段目花賣のつらね歌、三



段目菅の宮の道行、五段目四季の景事など、宛轉自在とまでは許し難きも、さすがに才華閃發して、紅は園生にかくれなく、旃檀は二葉より芳しの古語を思はしむ。

寶永三年五十四歳の時の作なる兼好法師物見車も、亦郷の宮侍從等の人物ありて、多少此曲と似通ひたる點なきにあらねど、全體の脚色は、宇治加賀掾の語り物なる龜谷物語に酷似し、文章の巧拙はもとより同日の論にあらす。

原本は金澤市松岡恒太郎氏の所藏にして、八行四十一丁、末に加賀掾の奥書あり、稽古本印行の最初にして、傳本極めて稀に、知る人少ければ、余が評釋に附載して、汎く同好の士に傳へんとす。

## つれづれ草

扱も其後、つれづれなるまゝに、日ぐらし硯に向ひて心にうつり行くよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。いでや當院後宇多の法皇と申し奉るは、いにしへの聖の御代の政暗からず、利世安民の御惠、いともかしこくましませども、さる子細にて天位をおりの、京極の女院諸共、大覺寺に移らせ給ひ、新院と稱し奉る。宮腹々にましますうち、おとの姫宮すげの宮と申せしは、御形世にめでたく、久米の仙人も通を失ひつべき御よそほひ、よそにもさぞな忍ぶの浦、蚤のみるめも所せく、くらぶの山もる人繁きにわりなく、通はん戀路ならずば、やもめ住みこそましならめと、御縁邊の結びもなく、既に二八の



春秋を御覽じすてたる御にほひ、上臈はしたの女房まで、優にのとけき洞の内、竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬ一人のみありさま、只人舎人に至るまではふれにたれごなまめかむ程につきつゝ、時にあふ君の惠む有難き院參多き其中に、大織冠十九代吉田の兼顯が三男、左兵衛佐小部の兼好とて、上北面の侍あり、されば神通は更にもいはじ、文質彬々として古風を仰ぎ、儒釋道を兼ね備へ、和歌にあやしく妙にして、天性やさしき男なれば、玉體に近習し、晝夜御前に伺候する。頃は正和元年四月なかばの事なるに、女院奏問ありけるは、ことしは雨風打續き、春のゆづへも知らざりし、されば姫宮の御方に、さぞつれづれにましまさん、いづ方へもみゆきなし、慰めまゐらせたうおはしますとの給へば、院げにもと思召し、さあらば吉田山じんぎくわん重寶無雙の所なり、幸ひ兼好あないにて、慰め申せとの院宣なり、承つて人々は、供奉の營み花々しく、

事毎に用意と三重聞えけり、定まる日にもなりしかば、御車をさしよせて、各相待ちある所に、警蹕にや驚きけん、御牛俄に猛り出、あなたこなたへ駆け廻る。舍人慌てふためけども、しこり立たる牛なれば、更にしづまる氣色なく、濱床にとびあがり、にれ打噛みてぞ臥しにける。爰に仙洞守護の武士淺原判官爲頼とて、てんぶ不敵の者ありしが、御牛飼の齋王丸が小腕とつてねぢ伏せ、おのれは何が役なれば、かゝる奇怪をなしけるぞ、討つて棄てんとひしめくを兼好縄りおしとめ、尤かれが所役を輕んじたるに似たれども、牛に分別なし、足あれば、いづくへか行かざらん、其止彼めをうたれては、けふの御遊の妨、不興の上のけがれなり、怪みを見て、怪まざれば、怪み却て破るとかや、後日にきつと制せられよ、けふはみらにと詫びければ、いづれも此理に服しつゝ、許されよ淺原、こらへられよ爲頼と、聲々にの給へば、力及ばずつき放し、エ、兼好だに無かりせ



ば、おのれ生けては置かじをと、尙齋王をにらみつけ、脰を張つて立ちければ、齋王生ける心ちなく、震ひく立ち上り、やうく牛をしづめつゝ御車にぞ掛けにける。事をさまつて其後に、宮御車に召さるれば、前後の行列おごそかにて、吉田の社に三重行啓ある。卯月ばかりの若楓花よりもなほ吉田山、みすの葵に風通ふ、賀茂山遠く見給へば、初時鳥雲間より、二聲三聲告げ渡れば、女房達の其中に、侍従の局とて、色好みありけるが、日比兼好に心をかけ、たよりもがなと、思ひ内の色をば外に悟られじと、なふくお供の殿達、只今の時鳥いかゞ聞かせ給ふぞと、につこと會釋し言ひければ、さすがなまめく上達部、色をとられて答はなく、數ならぬ身は存せずと、震ひくいふもあり、時鳥より只今のお詞こそと、言ふもあれば、宮を初め女房たち、扱したゝるき男やと、一度にははつと笑はるゝ。されども兼好取敢ず、久方の雲井のごかにいづる日の光に匂ふ山時

鳥と、吟じもあへず袖かき合せ、謹みぬたる品かたち、宮御心うち亂れ、堪へかね給ふ風情にて、誠に兼好が歌のさまげふの遊の花なるぞや、是へ是へと、御車近く色々の名香を御扇に載せられて、恥かしながらみづからが燻ゆる思の煙なり、あはれとも見よかしと、はゝるみ給ふ御顔ばせ、松に時雨の兼好も少しは色に染めぬべし、侍従此由見もわからず、早むつとせき轟き、顔に紅葉をひき散らし、人目もわかぬ戀衣、君と尻目にくらみあひ、溜息ほつとつきさまに、お車いそぎやと、ゆふしでの神のみ前に三重つき給ふ。扱姫宮はさまく御祈念終り、かたはらに幕うたせ、下戸ならぬこそをのこはよけれと、女房達のお酌にて、御酒宴始まる打節、牧笛風にさそはれて、しづのわらはが野飼の牛、あの山見さい、此山又見さい、戴きつれたおはら木に花折り添へて、比しも今は灌佛の花もてそそぐ薬の水、さなきだに、一夏には櫛ならねど摘む花を、召せく召され



よや、此花召せと賣りにけり、幕の内には御覽じて、さぞ興あらん、花の名を數へて賣れや、召さんとあれば、めのわらはども承り、さん候、我らは誠は當社に仕へ奉る禰宜かんなぎにて候が、宮此度の御まうで、優曇華と存する故、御慰めのため、かやうにしつらひ参りたり、さあらば花の名によそへ、面白う舞ひかなで、神樂太鼓の手をつくし、神と君との御心をいざ／＼慰め申さんと、拍子とり／＼、聲をかしくぞ歌ひける。面白の賤が仕業や、草刈笛の、ねよげに見ゆる、花は山吹、藤杜若、黄菊、かう菊、櫻草、賀茂のお山に咲く花は、丹たにのつゝじと白つゝじ、たが手に觸れてもちつゝじ、牡丹芍薬われもかう、忍び／＼くる／＼、やれかさ車や、花一つたもや、袂の玉椿、紫菀、石竹、月見草、有明のつれなく見えし別れより、おのが鳴く音か、鶏頭花、根笹まじりのりんだう花、董あぢさゐ、金仙花、君が手馴の手鞠の花は、一二三四五六七八九よ、とんと落ちても名は立たじ、我も洩ら

すな水葵、池におもだか眞菰草、われは野に咲くあだ花よ、さんさ折らば疾く折れ散らぬまに、さんさのお百合に、ゆりかけ／＼、さつとゆりかけ小姫百合、とけて添寝のそこ夏や、稀の御幸に、此度は幣はにとりあへず卯の花を、神のまに／＼をりはへて、いざ／＼神樂を捧げんと、おのがとりどり打鳴らす太鼓の拍子をすゝめける。神樂こそなまめかし、げに興ありて見えければ、宮はことなう御感あり、おの／＼祿を賜はりて、めでたく還御なされける。誠に艶なる御遊なりとて、皆勇みて歸らせ給ひける。

## 二段目

さて其後、よろづにいみじくとも、色好まざらん男は、いとさう／＼しく玉の盃の底なき心ち霜雪に弱る姿の菅の宮、兼好が色香をばおぼし忘るゝ隙もなく、たより波間に漕ぐ船の、こがれわびさせ給ひけり。されども侍従が戀路はしろし召す、ひそかに召され、近比おことがさげし、みも



恥しく思へども、をさなきより馴れなじみ、心を置かぬ露の身の、あだに消えんと思ひ切り、包まずあかし頼むごと、御心底こま／＼と語りくどかせ給ひ、何とぞ御身がはからひにて、こよひ兼好を忍ばせ、一夜逢はせてえさせよや、萬事は頼むと、御袖より御文を取出し、侍従が膝にさしおかれ、あら恥しや、只よいやうにとばかりにて奥にぞ入らせ給ひける。侍従ははつと胸つぶれ、扱はわらはが思はくの妨ごと、御文を寸々にやりすて、いかにお主なればとて、此戀ばかりは、しまけじもの、しやらくさや、腹たちやと、やがて表にはしり出、淺原判官爲頼を招き、なう爲頼殿、此比夜な／＼御庭へ犬猫の入來り、草木をあらし候へばよひのうち折々は心をつけて警護あれとの仰せにて候と、誠しやかにたばかりて、奥をさしてぞ入りにける。既に其日も暮れければ御現まへづつなや姫宮は、侍従の局なまかたちが媒にて、兼好やくるらんと、月待つふりにて、御庭の籬のもとに出給ふ。

かくとは知らで、淺原は御庭警護に來りしを、宮はそれぞと嬉しくて、する／＼とはしりより、顔と顔を見合、互に興さめ詞なく、かいふつてのき給ふは、薪を負へる山人の花に休らふ其風情、手もちあしくぞ入り給ふ。扱兼好は姫宮の御情忘られもせで、有明の獨寢がちに、まごろむ夜なきねやの内、ア、あだなりと起き出、廊の長押ながしに尻うちかけ、顯基の中納言、罪なくて見んと云ふ、あはれ配所の月もがな、又露こそはあはれなれと、獨眺めて居たりける。かゝる所へ侍従の局、ゆうなるさまにてつかつかと來り、膝の上にあかれば、匂も移るばかりなり、兼好あだめく男ならす、便あし／＼とや思ひけん、すりのけばもたれより、立ちのけば引きとやめ、いやさのみな厭ひ給ひそよ、何が扱姫宮さまの御寵愛の此殿を、わらはが分ぶんにて、お情とは及びなし、さりながら暫し問ひたきこととはいへど、云ふべきかこちあらざれば、庭の面を見廻して、なふあの竹にも



吳竹のいや嬪竹まきのなんごととて、品かはる由承る、教へてたべとありければ、兼好ことなき顔ばせにて、さん候、吳竹は葉細く、河竹は葉廣しといはせも果てず、手をとりて、されば其竹ならば、わりても見せん我心、死ぬるばかりに思へども、ア、數ならぬみ山木の、木折にならぬ戀の道、ぬれぬさきこそ厭ふべき、露の情をかけ給へ、つれなき人やとたはれける。さしもの兼好、いかゞ答へんと、しばし心を碎く折節、宮物陰より御覽あり、大きに嫉みせかせ給ひ、侍従々々と御手をうち、頬に召せば、はつと驚き、顔うち赤めて立出る。宮御色さまかはり、扱々おことは見限りはてたる心底かな、みづからが名をもくたし、とがなき兼好がうき名も立て、其上捉を破るといひ、重ねくの不義の者、ア、腹立や、つらにくや何方へも出てゆけ、來世までの勘當ぞ、はやとくくと、御聲震ひ、人目づゝみは高けれど、堰くにせかれぬむれ水、湯ともなりなん御氣色にて、奥にぞ入ら

せ給ひける。侍従呆れはて、しばし御跡をながめ、涙をはらくと流し、くちをしや、いかに主従なればとて、わらはが名を立て追出し、其身の戀を叶へんとは、扱情なや、つれなやな、所詮此事奏聞し、一つとがにと思へども、いや待てしばし我戀路、絶えなば絶えね玉の緒の、いとしき人の仇ならめと思ふ内にも、悪念の、怨めぐるや、小車の、丑の時詣して思ひ知らせん、腹立や、ア、腹立や、ねたましやと、拳を握り齒を鳴らし、はつたとにらむ眼より、血の涙をはらくと、腹立やと、呪ひ出る心の中、おそろしくもまた三重不便なり、是は扱置き、貴船の宮には社人達よりあひて、扱も神前の鳥居に、人をのろふと見え、大釘六本うちてあり、是は都方の女ばら、倍氣嫉妬の怨にて、丑の時詣すると覺えたり、神は非禮をうけ給はず、勿體なしと、いざ扱きすてんといへば、中にも老いたる宮つこ、いやしく所願空しくなすこと、却て慈悲の道ならず、所詮神前の橋を引き、



たやすく渡られぬやうにせば、おのづからとゞまらんと云へば、此儀尤  
と同一つ、橋の中の間ひきはなし、打連れだちて歸る波、猶物すごき。  
三重蜘蛛のいに荒れたる駒は繋ぐとも、思はぬ君を思ひてし、人をうけ  
へば忘草、たとひ我身に生ふるとも、憎しつらしのねぎ言を、かけて呪ひ  
の印あらなん、げにや思ふ事、金輪にもゆる燈火に、薪加ふる暝恚のほむ  
ら、是や迷といふならく、奈落の罪も恐しや、梅の花かうばしき、朧月夜に  
ことをとひ、みかきが原の露わけし、其有明も身の上に、せめて一夜だに  
逢瀬の情あら海や、げはしき山に迷ふとも、嬉しかるべき我命、刈穂の稻  
の露深き、稻葉にそぼつ秋の田の畦の細道いとせばき、女心の暗きより、  
鞍馬おろしはさつく、しんく、と、又とうくたる谷の水音とんとろ、  
とゝろと鳴る神の、貴船の川邊につきけるが、南無三寶橋は引たり、水は  
高し、よし、それとても、一念の矢先にかけん、岩ほを傳ひ、うへに臥したる

枯木の枝引、撓め、取付て手ぐりにたぐりて渡りしは、彼の高名の木登り  
も、かくやと怪しう、三重見えにける。さうなく渡りつく程に、神前に畏り、  
こよひ七日の満參なり、験を見せて給はれど、深く祈誓し、それよりも鳥  
居に向つて、此釘は姫宮にうつなるぞ、憎しつらしの一念、鬼ともなれ、蛇  
ともなれ、立所に取殺し、我を兼好に添はせてたべ、あら口惜しやと、丁ど  
打腹立やとて、はたと打ちやうく、丁ごうちければ、鳥居より血流れて、  
貴船の川もくれなゐの錦をさらすが如くなり、侍従喜び手を合せ、大願  
成就ありがたしと、千たび百たび伏し拜み、立歸る川波の、又元の木に手  
をかけて、なかば渡ると見えけるが、悲しや、此枝ほつきと折れ、深みにた  
んぶと落ちける時、不思議や、鳥居うめき出、御神體、猛火と燃え、山は震動  
雷電し、風雨車軸を、三重流しける。社人達驚きて、手々にたいまつとぼし  
つれ、川邊に來れば、恐しや、渦巻く淵の底よりも、侍従の姿、蛇身となり、紅



の舌を垂れ、無念や、腹立や、思ふ男をいたづらに、餘所の花となしけるか、あらねたましやと飛びあがり、鳥居をくるりくるりと、苦しげにつく息の、炎にまぎれ失せてけり、女の性は皆僻めり、貪欲深く理に暗く、つたなき女の色に耽るはおろかなり、みづから戒めて、恐るべく、慎むべきは只此惑なりけるはと、皆感せぬ人こそなかりけれ。

### 三段目

去程に、飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、樂み悲みゆきかひて、花やかなりし姫宮も、風の心地と臥し給ふ。かゝる病もあるにこそ、夜にだになれば發熱し、御殿屋鳴りし、光りもの現れて、おびえおそはれ給ふゆゑ、典藥の頭敦重入道、醫師忠盛を初め、醫陰の兩道術をつくし、かうべを病ましめ、額をあつめ、公卿詮議とりぐなり。中にも兼好は心にこめし言の葉の、色にや出んと思へども、御心を測り兼ね、晝夜相詰

めぬられけり。既に其夜も初夜の比、うしろのすだれをそつとあげ、化したる女さし覗く。人々是はと見廻せば、膝元につつくと立つ。太刀を抜いて切拂へば、忽ちに庭にあり。或は戸障子壁を走り、おぼしまを這ひめぐり、ばつと消えては又現れ、あらはれては、姫宮の御枕に立寄るを、人々驚きとりまはせば、虚空に立て、うらめしや、わらはは蓬生の葉末の露と消えながら、残る怨はありし報い、思ひ知らずや、思ひ知れ、怨めしの心や、あら怨めしの姿やと、枕にとびおり、打つかと思へば、猛火となつてぞ失せにける。宮は暫く絶え入らせ給へば、上から下に至るまで、是はくとはばかりにて、慌てふためくばかり也。御痛はしや、院后御褥にひれ伏して、げにや高さも賤さも、子といふものは持たでなん、萬寶に飽き満ちて、子ゆるに物を思ふぞや、命長ければ恥多し、四十に足らで果て死なば、今のつらさはよも聞かじと、歎かせ給ふぞ道理なる。時に淺原申すやう、某が弟



に具覺坊とて、眞言の大徳あり、かれを召されて御祈あるべうもやと申上ぐる。此儀尤然るべし、早とくくとの給へば、畏つて候と、やがて使を立てらるゝ。具覺坊心得て、持經本尊とりもたせ、大床に伺候する。兼好は出むかひして、まづ姫宮の御物のけいかなる祟と御覽じて候といへば、具覺息を閉ぢ、目をふさぎ、阿字本不生の虚空界に至て、此障を鑑るに、過ぎし吉田の御社參、赤舌日といふ大悪日に當りて候、然れば神慮の御咎め顯然たり、いでく加持し申さんと、壇を飾れば、いや是なふ具覺坊、赤舌日といふ事は、陰陽道に沙汰なき事也、其上悪日なればとて、神慮の咎めあるべきにあらず、悪日に吉事をなすに必ず吉事、又吉日とても悪事をなさばあしかるべし、何の故なき神の咎め心得がたしといへば、具覺氣色を損じ、エ、なま物しりの物とがめ、四部の弟子はな、比丘よりは比丘尼は劣り、比丘尼より優婆塞は劣る、かゝる下品の優婆塞にて、六根淨

の比丘に向ひ、あつばれ舌長しといへば、兼よしにつこと笑ひ、扱輕々しの六根淨、四部の弟子はさは知らず、いかに御身が立腹するとて、君の御爲言ふべき事を言ふまじきか、思ふこと言はねば腹ふくるゝ、よし神の祟にもせよ、御邊が分にて、神慮をなだめんとは、それこそ誠に舌長しと、あざ笑つて申さるれば、爲頼こらへかね、つと出なふ聞きにくし兼よし、然らば御邊具覺にまさつて、此御病氣を治すべきか、言はすれば言ふ事と、人もなげなる學文だて、いやはやかたはら痛し、いかに具覺は、やはや加持し奇特を見せ、閉口させよといひければ、具覺壇にさしかゝり、印ことごとしく結び、いらだか珠數をおしもめば、不思議や此珠數ふつと切れ、小へびとなり、姫宮の御床に這ひ入れば、又たえ入らせ給ひけり、其時兼好からくくと笑ひ、主なき家には、狐、ふくろふ、こたまなども入り棲むとや、廣言吐きし六根淨の比丘の本心に主なき故、却て惡靈のやどり



となる、あら笑止やと申さるれば、爲頼いよ／＼せきにせき、さあ然らば御邊が手業にのくべきかと云へば、兼好聞き給ひ、ア、いかにも／＼、護摩の法は知らねども、某に宣旨あらば、忽ち平癒なましめんと、詞を放つて申さるゝ。院を初め奉り、さほどに覺えのあるならば、など最前より申さぬぞ、早とく／＼この御事也、兼好謹んで承り、其儀にて候はば、しばしの御暇給はらんと、御前を立て出けるが、いか／＼心に思ひけん、立歸り立歸り、あとなつかしげに見送りて、泪にむせび出らるゝ。扱兼好は中門まで出ぬらんと、思ふ比、御褥の内よりも、小蛇する／＼と這ひ出、是までぞ怨靈此後またと來らしといふ聲ばかり残りつゝ、消すが如くに失せければ、不思議や宮の御心地、夢のさめたる如くなり。上中下に至るまで、悦び賑ひ給ひけり、かゝる所へ御隨身近友、あわた／＼しく参上し、左兵衛佐兼好發心遂げ、行方しらす罷出候、則鳥帽子狩衣に髻をそへ、中門に残し

捨て候と、御前にさしあぐる。各驚き御覽すれば、袂に一首を書きつけける、みさび江の底の玉藻は亂るとも、知らるな人に深き心を、院を初め奉り、こは心得ぬ發心かな、功成り名遂げて身退くといふ事を心得しか、いづくへか行きぬると、忝なくもりやうがんに御涙しきりなれば、御前伺候の公家大臣、いづれも袖をぞしぼらるゝ。されども宮の御本復まづまづめでたし／＼と、各お暇たびけれども、具覺坊と爲頼には、誰とりあふ人もなく、却て兄弟聞きにく／＼いさかひ腹立ち出けるを、笑はぬ者こそ三重なかりけれ。扱其後に姫宮は、めものとの裏葉をひそかに召され、有りし次第を語らせ給ひ、皆是わらはが故なるに、兼好が志よそに見んも恥し／＼、いづくまでも尋ねゆき、此恩を報すべし、必ず人に洩らすな、御身を偏に頼むぞと、涙にくれての給へば、めものとも哀と思ひけんげに御道理、此上はいづくまでも御供と、忍び出させ給ひしは、いとことわりに、三重



忝なし。とても濡れたる袖の露、ねやの空炷、たち去らで住み果つる習ひ  
ならば、物の哀もなかるべし。世は定めなきこそいみじけれ、人の命はか  
げろふの、春秋知らぬ蟬の羽衣うすくとも、かけし契をたがへじの、情の  
程ぞたぐひなき。げにつくづくとも、一夜さだめの睡言も、わけこし端山繁  
山の、繁き思を語らば、心こよなう慰まん、にくや似氣なきあなかうど、  
知られず知らぬえびすさへ、世のにぎはひと中人に、さそはれ靡く水草  
の、ア、水臭き妹背には、たとへ千とせをすぐすとも、はてはあだなる夢  
心地、暗のうつゝかおぼつか、行くさきわかぬ八重むぐら、茂れる道の  
うれたきに、鬼一口も恐しく、菅の小笠には、らほろめくは、雨か木の葉か、  
天の川とわたる船の櫂の、筆か、白玉か何ぞと問はん人もなく、誰に心を  
置き餘る、露にむれし遣水の、音はりんく、ちんく、ちろりんと鳴く  
蟲も、かごとがましき夕暮に、月の影さへ曇りつ、曇れつ、曇りつ、曇らばく

もれ、とても人目を忍ぶにえく、やれ忍ぶにえ、とても今宵は篠薄、萩の  
おとづれ物さびし、峰の松風、野寺の初夜、ありし其夜が思はれて、涙催す  
折からに、無常の嵐ばうく、さらく、はつと吹いては、本あらの萩も尾  
花も打亂れ、靡き合ふ夜の憂き中に、我手枕もいつの色、双の岡につき給  
ふ、親のいさめ世のそしり、包むに心の遠なく、あふささるさの御物思、げ  
に色好みのわりなさは、かくこそあらめと、見る人聞く人、おしなへ皆ぬ  
らさぬ袂はなかりけり。

#### 四段目

かくて其後、花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは、人の世も猶又  
然り、財多ければ身を守らず、はまれは又そしりのもとの、萬事は皆非な  
り、只今の一念をいかで空しくなすべきと、終におのれが本意を立て、兼  
よしをそのまゝに兼好法師と改名し、花とならびの岡のべに、待つこと



もなき柴の戸の明かし暮らせし遁世は、心にくくぞ見えにける。かくて  
姫宮は、苔の細道踏みわけて、爰やかしこと見給へば、住み荒らしたる草  
の戸の庭の木の葉にうづもるゝ篋の雫ならでは、露おとなふものもな  
し、閑伽棚に菊紅葉など折り散らしたるは、さすがに住む人あればにと、  
めのごの裏葉とぼそに寄り、くさめくといひければ、兼好不思議に思  
ひ、庭におり、誰なれば何事をの給ふぞやと問はれける。裏葉聞てさん候、  
やゝはなひたる時、かやうにまじなひ申さねば、死ぬるなりと聞きしゆ  
ゑ、養ひ君の此比人にのろはれますが、今もやはなひ給はんかと、か  
くは申すと答ふれば、さて殊勝なる志と、戸をあけ見れば、姫宮なり。はつ  
と驚きたてんとす。宮走り寄りすがりつき、扱もつれなきふるまひやと、  
涙にむせびの給へば、思ひ切たる兼好も、今のあはれに袖ひちて、誠にか  
かる所まで暮はせ給ふ御志、ありがたくは候へども、今は某も木のはし

のやうに成りはて、伴なふものは見ぬ世の人、過ぎにし方の戀しさの  
みせん方なう候と、打ちしほれてぞ申さるゝ。宮此由聞召し、いやとよ、み  
づからも今は戀路を思ひ切り、御身が深き志の恩をも報じ、弟子となり、  
佛を願はんため、遙々尋ね來りしと、涙にくれさせ給へば、扱はさやうに  
ましますか、まづく入らせ給へとて、庵へ請じまゐらす。宮は棚なる  
文どもを取り開き御覽じて、此頃御身かきしと聞く、つれく草とは是  
ならん、言葉ののどけさ、志のやはらかさ、月花に寄せ、和歌によせ、をとこ  
女の情にかけ、人のをしへ、世の寶、人間常住の氣をいましめ、無常を示す  
文法は、詞にいかで及ぶべき、さるにても此中に三ヶの大事とて、祕密の  
子細ありと聞く、長き世までの形見なり、わらはに許し傳へよと、いとせ  
ちにの給へば、兼好手をうち、からくと笑ひ、そも此の文に祕傳とは、た  
が申上げけるぞ、ア、おろかし淺まし、我道はいふにも足らず、萬藝に



秘事するを聞くに、おのれが心に得がたき所を秘事といふ、是何ぞ秘事なるべき、只物の極意を教ゆるに教へられず、習ふにも習はれず、しかもまづげの如く、目に有て目に見えず、多年に磨く玉の光、面々心にそなはれば、至て則しせんに知る、始終本末間に髪を容れずして、しかも胡越を隔つれば、秘して傳へんやうもなしと、理をつくし云ひければ、宮はつづく聞召し、げに尤殊勝なり、さりながら盛親僧都が白うるりとは、まづ何事なるぞ、兼好聞て、さればさるものは我も知らず、伊勢の濱、荻難波の蘆、かりなる物は人の名と、心をそへて御覽せよ、ヲ、げに面白し、又布のもかう、とはいかに、扱よく御心かけられし、葵の露の玉簾、よもぎあやめも引添へて、軒端に近き物なれや、猶放免のつけ物や、まかり車の五つ緒の、四つも五つもむつかしや、傳へて聞き學びて知るは、まことの智にあらず、いかなるをか智といふべき、不可は一條なり、いかなるをか善と

いふ、まことの人は智もなく、徳もなく、功もなく、名もなしと、語り給へば、姫宮も今こそ夢はさめたりと、御感涙はせまわへず、かゝる折ふし侍従が姿、夢現ともなく現れて、おら恥しや、みづからは應長の比、伊勢の國より現れ出し、鬼女なるが、御身和歌の徳たけし、其本心をかすめんため、假に侍従が色をなし、心を惱ましかたぶけしが、まことの光にけおされて、いと、鬼畜の苦みも、只今のしめしにて、悟開けて恨なし、あら有難やと、忽ちに忍辱慈悲の姿となり、雲の遙に上らる、兼好重ねて、あれ御覽せ、化物なんぞいふ物も、多くは女の形なり、女の我執深きこと、其しるしを見せ申さん、いざこなたへと夕月夜、そもの野邊へと出らる、扱兼好は懐中より鹿笛を取出し、二聲三聲吹き鳴らし、是はこれ鹿笛とて、狩人ならでは吹き難く、妻戀ふ鹿もよらぬなり、扱女のはける足駄にて作れる笛のさふらふが、是は又たが吹ても、必ず鹿のよりくるなり、いで御覽



せよと取出し、ほそろくせりと吹く笛に、つれて小鹿のよりくるは、やさしかりける氣色なり。げにや女の髪すぢにてよれる綱には、大象もよく繫がるゝと説く法の教を常に觀念し、執著つみの深きこと、能く思召し知り給へど、いひも果てぬに、向ふより誰とは知らずむらがり來る。兼好はつと驚き、宮を草むらに入れまゐらせ、上には紅葉ちらしかけ、扱月影にすかして見れば、淺原判官爲頼、舍弟具覺坊、奈良法師の兵士數多かりもよほし、兼好をきつと見て、やあそれなるは兼よし入道か、先度の意趣を晴らさんため、庵室へ寄せけるぞ。あれ打取れどひしめく所に、いづくともなく武者二人、兼好が前に來り、爰をば我らにまかせ給へと、太刀長刀をさしかざし、大勢を引受けて、花を散らして三重戦ひけり。寄手の惡僧、いろをし坊、白梵字、暮論字、梵字、かんじ坊、むねとの法師皆うたれ、具覺坊も腰され損じ、今はせん方あらざれば、爲頼大きに怒をなし、只射取ら

んと弓に矢つがひ、さしつめ引つめ、放つ矢を、はらりくくと切拂ふ。今は何をか期すべきと、弓投げ捨て、うつてかゝるを、二人の武者驅け向ひ、其身かろげにあなたへ飛び、こなたへかけつて、飛鳥の翼を並ぶる羽音もかくやと、すかさす左右よりつつと寄り、づたづたに切り散らし、僅に残る者共を、四方へばつと追ひ靡け、立歸つて、我らは筑紫の土大根、ひとへに信じて、文にも書かれし嬉しさに、現れみつき候と、おのが姿をあらはすと、見ゆれば消えて、三重失せにけり。かゝる所へ堀川の内府を勅使として、宮御むかひの御ながえをかき來る。又兼好の得道甚感じ下さるゝ條、急ぎ院參あるべしと、各打連れ參らるゝ。本より賢愚得失の境に居らず、是なる時は是非なる時は非にして、心にまかする道なれども、道徳四海に儀行して、敷嶋の四天王、うづもれぬ名を残しける末世の鏡は、是なり、只此人なるはと、皆仰がぬものこそなかりけれ。



五段目

さる間、とこしなへに違順に使はるゝ事は、偏に苦樂のためなりと、名利を離れ、世をかるき麻の衣の墨染にて、昇殿あるこそ有難き。院めづらしく思召し、玉座近く召され、和歌有職より始めて、萬の道しばし問答ましますに、一としてあやまらず、其理恰も流るゝが如し。扱こそ和漢の才人、誰かは是にまさらんと、則姫宮の御師範として、猶敷嶋に長せらる。宮仰せ止らるゝは、そも歌の道廣くして、目に見えぬ物までも、詠せずといふことなし。されば月花は宮も藁屋もへだてなし、四季折々の民のわざ、何とぞ見たうさふらふと、御訴訟あれば、院聞召し、さあらば龜山の池に、大井の水をまかせ泉を満へ、木草を植ゑ、四季をつくらせ申すべしと、則兼好指圖にて、四季の氣色をうつさるゝ、折節の移りかはれる姿こそ、げに物毎に珍らしや、一きは心も浮きたつは、まづ初春の朝ぼらけ、一夜隔つ

と思へども、こぞは遙に遠山や、端山もわかぬ薄霞、うづめどかるき淡雪の鹿の子まだらひま見えて、百千の鳥の聲々も、猶春めきて長閑なる垣根の小草萌え出て、松は五葉の深みどり、梅は白き薄紅梅、定家の卿の軒近き、一重も八重もゆかしきに、ひとくくと、鶯の厭ひて鳴くはしほらしや、深山櫻は盛りにて、岸の山吹清らかに、藤のおぼつか波風に、亂れ亂るゝ、青柳の若葉のしげみ涼しげに、山時鳥初音鳴く、橘、桂、白く咲けるは夕顔や、蚊遣ふすぶる伏屋の軒を、うたて水鶏の、ほとくと、叩く妻戸を人な咎めそ、人やせくらんせき入れて、早苗とるなる山川に、鶺鴒の簪かげ暗く、いと暑さも夏刈の、蘆間こがるゝ、棚なしを舟、棹の雫に袖ぬれて、秋かたたどる川遣遙げにひやゝかにぞ、三重見えにける。あやめ、はちす葉、杜若、花踏みしだく白鷺や、螢ひろへばおのづから我手の内に玉さでや、風こそ薫れ、あふぎあみ、玉嶋川にあらねども、小鮎さばしる早瀬川、



さらくさつとすくひあげ、餘念も夏の短夜は、ア、いとま惜しや、釣竿  
のふしもしどろに歌ひつれ、からりころりと沖漕ぐ船も、よなもさこが  
れ、流るゝ月も早うつり變れる秋風に、霧たちのぼる夕まぐれ、萩の下葉  
も露深く、紅染むるもみぢ葉に、瀧の白糸色になる、わさ田、おくて田、雁鳴  
きて、野分のあした哀なり、稍弱り行くきりくす、つゞりさせてふ鳴く  
聲に、ほころびわたる藤袴、菊の著せ綿いとやさし、みのる木の實は小柑  
子、栗や、小柿に、榎、香椎、枝うつりする友猿の、紅葉ふみわけ子を思ふ、腸を  
断つ聲までも、取集めたる悲しさに、木々の朽葉は、ちりくはらくは  
らりと降る、霞、汀の水おし分けて、舟漕ぎめぐり見渡せば、霜のふすまは  
さむけきに、つがひ離れぬをし鳥の、妹背にさはる鶴、鶺鴒や、真砂にねぶる  
蘆、鴨の、緑の翼、白砂の雪折竹の、笹の葉の酒、あたゝめて、盃を今も流に浮  
ぶれば、彌生ならねど池水に、巴の字をなせる水車、くるりくくと舞ひ遊

ぶ、鶴と龜との齡にて、幸ひ心に任せたる、めでたき君の御遊やと、聲を揃  
へて三重ほめにけり、兼好袂を翻し、三行一致の御池の水、本來不色の底  
深く、汲めども盡きぬ道廣く、教へ始めし最初の佛、來らず去らず、百億萬  
歳と、袖をかへして謠ひけり、末繁昌の物語、めでたしくくとて、諸人  
に語りて興じき。

右此本者依小子之懇望附秘密

音節自遂校合令開版者也

加賀掾

延寶九辛酉皁月上旬

二條通寺町四へ入町

山本九兵衛刊

つれく草終

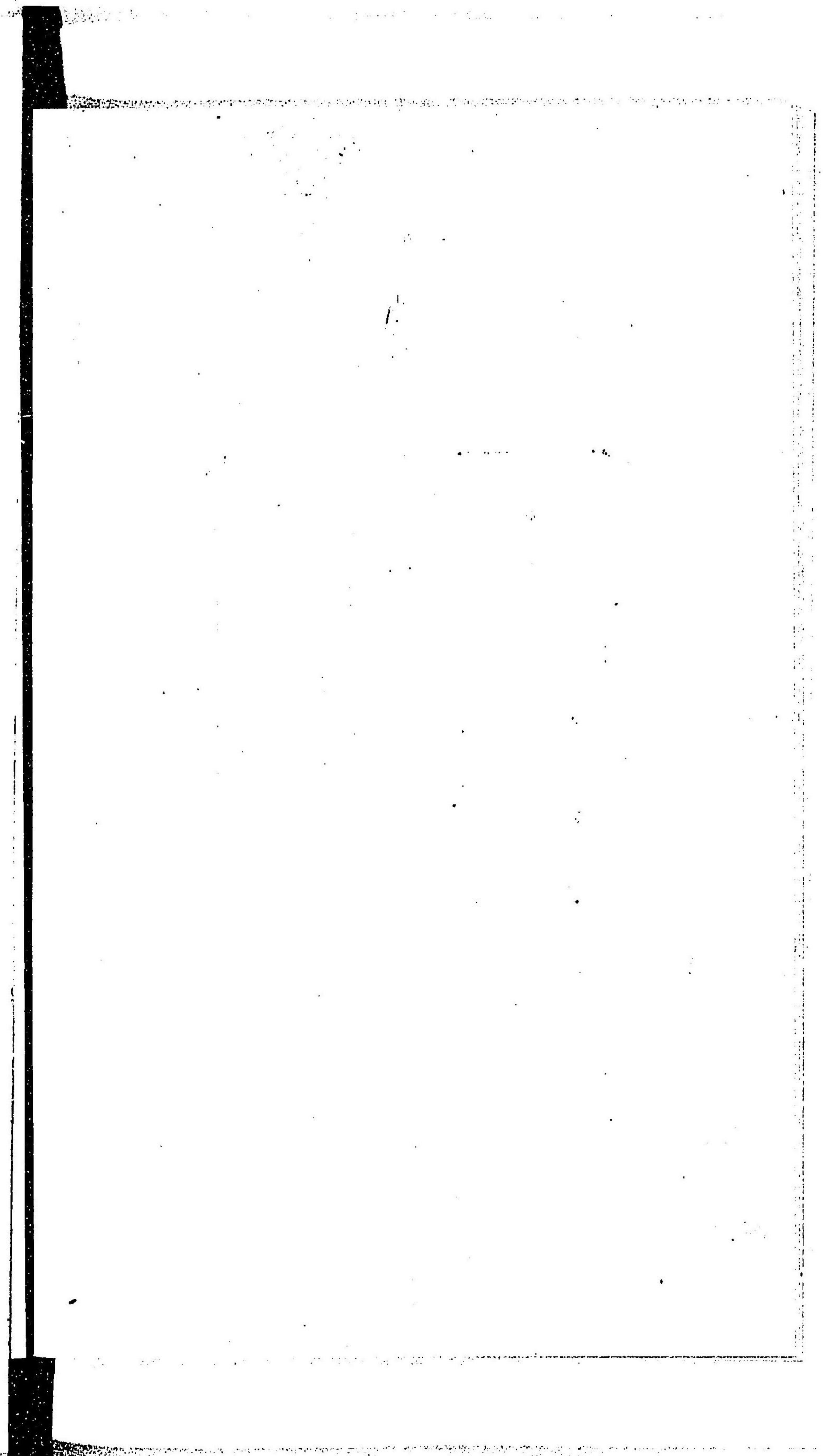


明治四十一年四月四日印刷  
明治四十一年四月七日發行

不許複製  
定價七拾錢

著者 藤井乙勇  
發行所 金澤市上本多町二丁目十二番地 三浦理  
印刷者 東京市神田區錦町一丁目十九番地 新井由藏  
發行所 東京市京橋區木挽町二丁目十三番地 有朋書店  
印刷所 東京市神田區錦町一丁目十九番地 新井電新堂  
東京市京橋區木挽町二丁目十三番地







1508

Ready, Right, Run, Say, See, Send, Set, Shall, So, Some, Such, Take, Tell, That, There, Thing, This, Leave, Let, Long, Make, Matter, May, Mean, Must, One, Open, Other, Ought, People, Put, Quite, Enough, Expect, Few, Find, Get, Give, Go, Good, Hand, Have, Here, Help, Hold, How, It, Keep, About, Again, All, Another, Any, Back, Be, Better, Break, Bring, Can, Catch, Come, Do, Either, 此書は著者にして天下の渴望を驚す其世を益するや大に其貫用英語の普及を助るや偉なるべし。本書の内容はとして江湖に叫びたる高等商業學教授英人ハワード・スワン氏が綿密周到を以て知らるゝ勝俣銓吉郎氏と共に世の英學生が此種の著述を渴望するや大早の雲霓も會ならざりし。而して今日川英語の必要を以て多年の警語

○班  
○評  
○乘  
日早ければ一日の利あり請ふ遲延することなかれ  
大方の讀者も亦著者を信じてその時間の一部を割きて本書に就き日々練習せば進境著しきものあるや必せり、一洞察し本書を著して以てこの要求に應ぜんとせり。著者は一般英學者に取りて本書の極めて有益なることを信ず、ABCを知るといふに止り英語を活用する力の乏しきは畢竟彼等が適當の糧を得ざるに起因するものなることを、れり、以て會話を學ぶべく以て英文和譯を習ひ和文英譯を練ることを得べし。本書の著者は一般中學生が單に本書は日用句集の最も完備せるものにして輯むる所の成句七千に達し而もこれ一々邦人の川ぬ憎きもの而已に限

### 應用英和新辭典

全一冊 郵稅不 要

早稲田大學講師 勝俣銓吉郎先生 共著  
前高等商業學校高等師範學校教授 ハワード・スワン先生

## 有朋堂書店發行書目



分類解和文英譯法

男 學院教授 南日恒太郎 先生 著 校 閱

全一冊 郵税金四錢 正價金參拾五錢

すに足らんか 説明を促して遂に丁寧親切ならんことを勉めたり亦以て受験の伴働となし獨習の指針となし教授の參考となし及構成法の項目四十四個なりしを増して四百となし勉めて材料の多趣なる様ならん事を期し(五)而して各種の回今般改版増訂を施し(一)舊版三編より成りしを増して四編となし新に緻密精細なるインデックスを附して大に讀者の著者の自ら苦しみむ所に頼みて案を立て世に問ひし和文英譯法は幸に江湖の好評を博し今や版を重ねること十數

増訂和文英譯法

男 學院教授 南日恒太郎 先生 著 校 閱

全一冊 郵税金六錢 正價金五拾錢

數増加等の結果價格の己むを得ざるものあるが故に本書に別名を附し舊版と共に發行し以て購讀上の便を圖れりて語句の記憶に便し全編の研究活用を自在ならしむ之を舊版に比せば効用蓋し彼に倍するものあらん但し紙編解釋の基礎となし(三)全編を通じて譯註を益々詳細ならしめ(四)更に詳密なる熟語のインデックスを附加し(一)舊版の材料に大刷新を施し新に約二百餘題を加へ(二)舊版組織以外別に一區分を設け縱横詳解を施して全に大訂正を加へたるもの即此の「英文解釋法」なりとす

英文解釋法

男 學院教授 南日恒太郎 先生 著 校 閱

全一冊 郵税金六錢 正價金四拾錢

分類英文詳解

男 學院教授 南日恒太郎 先生 著 校 閱

全壹冊 郵税金四錢 正價金參拾錢

ものにして比較的僅少の勞力を以て英文の眞髓を悟りし應用の力を養はしめんことを期したり 本書は著者が一般英學生の解釋力に乏しきを慨し多年の經驗に徴し最も適當と確信したる考案に依り編著したる 半載にて750 pages 程あり cloth cover, binding & printing も中々立派なるものなり (英語青年「評」) 號を附せるを以て會話研究上大なる助となるは云ふまでもなく和譯の好實例を示すと云ふべく書籍の大きは菊判を附す殊に其の expression に一々其の性質を述べし ordinary conversation ならんや polite form なるや其符なり假しは will の語の應用は 382 の例あり take 362 の例を以て其の活用轉化を示し且つ實例に適切なる對譯の著にして其の目的は専ら普通の英語を有りとする方法に應用したるもの實に應用辭典の名に背かざるもの 本書は先般「青年」紙上の廣告に見えたる如く Prof. Swan 著 Japan Times と「青年」記者たりし勝俣氏と しとするものなり (中外英字新聞「評」) るや大なるべければ我儕は近來出色の好著述として本書を世の英學者に推薦し兼ねて又スマン勝俣兩氏の勞を多りても机右に缺く可からざる參考書ならむ之を要するに本書は何れの方面より觀るも英語研究上に其効益を與ふ學び得ざるもの多し然るに本書は一々適當にして正確なる和譯を施しあれば英文の新聞雜誌又は小説を讀むに方に日常使用する文句の中には彼國人には何れも無きも外國人たる吾人に取ては中々解し難く而かも字書に就きてる文句が非常に失禮野郎の文句にて先方の感情を害するが如きは此書を平生熟讀し置かば其策を免るべし 殊へて其用法を識別したれば英學生が動もすれば自分では丁寧なる挨拶なりと思ひて英米の紳士淑女に話し懸けた句若しくは俚語若しくは隱語若しくは文章に用ゐる句若しくは無教育者の用ゆる語語又は洒落若しくは商業用用ゐる句若しくは親密なる朋友又は家族間に用ゐる句若しくは親しからざる知己や一面識なき者や長上者にイナオム若しくは親密なる朋友又は家族間に用ゐる句若しくは親しからざる知己や一面識なき者や長上者に類な掲げ其語を用ゐたる文句を類集し之をスマン氏が「一々平生熟讀し置かば彼も用ゐる會話若しくは通常屢々用ゐらるる Foo, Tty, Turn, Use, Very, Want, Way, Well, What, Will, Wonder, Yet の如き日用英語の楔子たるべき



に依りて、豊富なる西洋滑稽趣味を賞玩することを得べし。  
 本なり。英語を學ぶものは教科書以外の新風味に接して進境に一刺戟を興ふべし。英語を解せざるものも譯文のみ  
 捕獲さへ加へたるものにして、卷中各篇一々其趣を興にし、泰西人情の各方面を發揮して餘蘊なく興味無盡蔵の珍  
 本書は數千の西洋一口噺中より殊に秀逸なるもの數百篇を選びこれに譯文及註釋を添へ且清酒奇拔なる數十葉の珍

英和譯 西洋柳樽

RISING-GENERATION SERIES, No. 2.  
 早稻田大學講師 勝俣銓吉郎先生編

全一冊 郵税金四錢  
 正價金貳拾五錢

に歸む  
 英語の一方面を窺ひ、英語の眞活用を學ぶの便、此書の如き蓋し稀なり、英語習熟の好資料として、敢て江湖  
 顧して哄笑十八番といふ、必しも空名に非ず、對照の譯文は巧に原文の趣を寫し、脚註亦悉く肯綮に中る、豊富な  
 列舉せずと雖、十有八篇の詩文、對語、獨語、何れも諸語輕妙、諷刺奇警、人をして抱腹絶倒せしめざるはなく、  
 本書收むる所、マークトウエー、セローム、ケイ、マクスオレルあり、オールドリッチあり、其他一

英和譯 哄笑十八番

RISING-GENERATION SERIES, No. 1.  
 學務院教授 熊本謙二郎先生譯註

全一冊 郵税金四錢  
 正價金三拾錢

より指導を受くるの感あらしむ、眞に是れ初學者の寶典にして又一般英學生の好伴侶なり  
 て編述せるものにして、其の方法の新奇にして説明の懇切なる數多の挿話と相俟て學ぶ者をして宛ら即ちありて  
 本由り、全く英語を解せざる人々をして一層進近にして而も日常一層必要なる英語を獨習せしめんと目的を以  
 本書は發刊以來江湖の大喝采を博したる正則獨修英語讀本の著者が、更に簡易明晰にして何人にも入り易き方法

初學 英語獨修新書

正則中學校教師石川辰之助先生著

全一冊 郵税金各八錢  
 並製正價金四十五錢  
 郵金二百二十有餘個

特色第三 速成法を用ひたること  
 本文及び練習問題は實用的のもののみを採り第三卷に進めば新聞雜誌を讀解し得せしむる健全なる  
 特色第二 語格文法説明も兩語の對照より既起し了解極めて容易なること  
 こと  
 有害となる點一も無きのみか此書に依りて始めて日英兩語の比較對照に基き正しき發音を學び得る  
 特色第一 獨修書編纂上最も困難を感じる英語發音の示し方は簡明にして且正確なるが故に他書の如く學生に  
 からず

正則 獨修英語讀本

石川辰之助先生著  
 男爵 神田乃武先生贊助

全五冊  
 第五卷 未刊  
 第四卷 正價金卅五錢 郵税金各  
 第三卷 正價金三十錢 郵税金各  
 第二卷 正價金廿八錢 郵税金各  
 第一卷 正價金廿五錢 郵税金各

きなり  
 一ル新聞社に入りて同紙主筆プリンクリー氏をして其總筆能文を噴發せしめたる人以て本書の價值如何を卜す可  
 文教授に幾多の經驗を積まれたる佐々木文美先生に囑して茲に本書を出版す。先生は前に外務省に在り後横濱メ  
 易其度に適し繁簡其宜しきを得たるものは蓋し妙し矣弊堂茲に見る所あり多年諸學校の教鞭を執りて親しく英作  
 和文英譯又は英作文の教科書として出版せられたる書其種類甚だ多しと雖も中學四年級及五年級の用書として難

英語作文教本

山口高等商業學校教授 佐々木文美先生著

全二冊 郵税金各四錢  
 下卷 正價金參拾錢  
 上卷 正價金貳拾五錢







ふ迄もなく、一般學生も一度本講義に由て學べば、斯道の業に入りん事蓋し容易の業たるべし。更に丁寧に、何人も之に由らば所學の大綱を得し得べき考案を執りたるを以て、其師なきを託つ篤學者は云所あるべきは論なし、講義録を讀みて隔靴掻痒の感あるは、講義録其の感なきを察し、其功果も亦隨て多からざるべきは論なし、講義録を讀みて隔靴掻痒の感あるは、講義録其の感なきを察し、其功果も亦隨て多講義録は、其の讀者をして宛然教室に在つて親しく教師の指導を受くるの感なきを察し、其功果も亦隨て多

復習用 數學 講義

正 董 先生 著

正 董 先生 著  
 算術之部 全一冊 (近刊)  
 幾何之部 全一冊 (既刊)  
 平面三角法之部 全一冊 (既刊)  
 代數之部 全一冊 (既刊)

明し且數多の問題を加へ發末に其解法を示されたるものなり。本書も化學解法と同一の目的同一の旨趣を以て編纂せられたるものにして物理學の全般に涉り簡明に其理論を説

計 算 物 理 解 義

山下安太郎先生著

合本正價金 四拾五錢 郵稅金 六錢  
 下卷正價金 四拾五錢 郵稅金 六錢  
 上卷正價金 四拾五錢 郵稅金 六錢

計 算 化 學 解 義

正則豫備學校講師 山下安太郎先生 共著

全一冊 正 價 金 四 拾 五 錢

は唯教科書を讀んで望洋の嘆を發せらるゝ諸君も本書を一讀せられれば容易に彼岸に達せらるを得ん。なる解式をも示されたり。本書の趣旨は一に讀者をして化學に關し概念的の知識を得せしむるに在り。明し夫より元素各論無機化合物各論及有機化學の一斑に涉り其間に重要な計算問題數十を加へ且其末に其詳細層深く化學を學ばんとせらるゝ者の參考に資せんが爲編纂せられたるものにして最初に一般化學の理論を丁寧に本書は中學校師範學校卒業程度の學生諸君の進んで高等の學校の入學試験に應せんとせらるゝもの若くは更に一

記せずと雖も本書を愛讀するの士は自から首肯するの點夥多なるべしと信ず

師に就き教を受くるの感あるべし著者は其他種々の方面に於て學生に利益を與へんとて苦心したれば一々茲に列益あれば官立學校入學受験者小學教員受験者獨修者にして本書に就き練習を積まば解法の極意を了解し親しく其ず本書の解法は暗示の方法に依り幾分考量の餘地を存しあれば不識々々誘導せられ理論を明瞭に知悉するの利せば能く十百題の解法に應用し得らるゝの効あり、又或種の解法は學生の思案力を減殺し有害無益なるに拘はりに勞多しうて益鮮し本書は解法の綱要方針を記するものにして問題の選擇に考案を費したれば一題の解法を會得數學問題は現在の教科書に掲げあるものと雖も既に萬を以て數ふ可し、修學者が無方針に之を學びたらんには徒

自習用 數學 解法 綱要

正 董 先生校閱 藤井銈次郎先生著

全四冊

定價各金 卅錢 郵稅不要  
 代數の部 三角の部  
 算術の部 幾何の部

ず願くは一覽せられんことを

科の教科書并に參考書に充てらるゝの榮を得たり本書の有益なることは世間自ら定論あるべきを以て茲に喋々せて學習及可習の際樞軸となるべき理論及重要なる應用問題を知ることを得べし故に數多の中學校に於て先に補習有する以上は其要領を得るときは遂に高き點に達することを得るものなり本書は其の要領を示せるものなるを以如何なる技術如何なる學問にても要領骨髄のあらざるものなし學習するもの如何に平凡なりと雖も通例の腦力を

數 學 綱 要

轉 正 董 先生 編

全二冊

定價各金 卅五錢 郵稅不要  
 算術平面立體幾何の部  
 代數學三角法の部



るの士は、何人も本書に由りて其の目的を遂ぐる事を得べけん

に基き、之に加ふるに著者自身が發音教授の經驗より得たる有益なる説明を以てす、言語學の大綱を知らんと欲す下の一大缺陷なり、本書は此の要求に應ぜんが爲めに編述せられたるものにして所論多くは斯道に關する外國書國語の教授を單に文章の讀み書きのみに限り、其の教課の根底たる發音の教練を忽諸に附するの傾あるは實に刻

### 發音學講話

全一冊 郵税不 要  
定價金六十錢

東京高等師範學校教授岡倉由三郎先生著

を解き得る所のものなり」と、以て本書が如何に斯學を學ぶもの、寶典たるを知るに足らん

方式を理會したる學生は普通の教科書の定理以外の知識を要せず又平凡なる手腕を以てして尙能く困難なる問題て氏は其自序中に「此方式は予及子の同學者多年の經驗によれば學生の容易に理會し得るものにして一旦此初等幾何學の範圍に於て作圖題を解くに方り進據すべき一般方法を按出しこれを骨子として編述したるものなり其原書は氏が多年ミュンスターの實科學校の高級及州立工業學校生徒に斯學を教授せし際の經驗により所謂本書は獨逸ホッフマン氏の原書の一部の翻譯にしてハテルセン氏の作圖題と似て而も其内容組織を異にせるもの

### 幾何學作圖問題解法

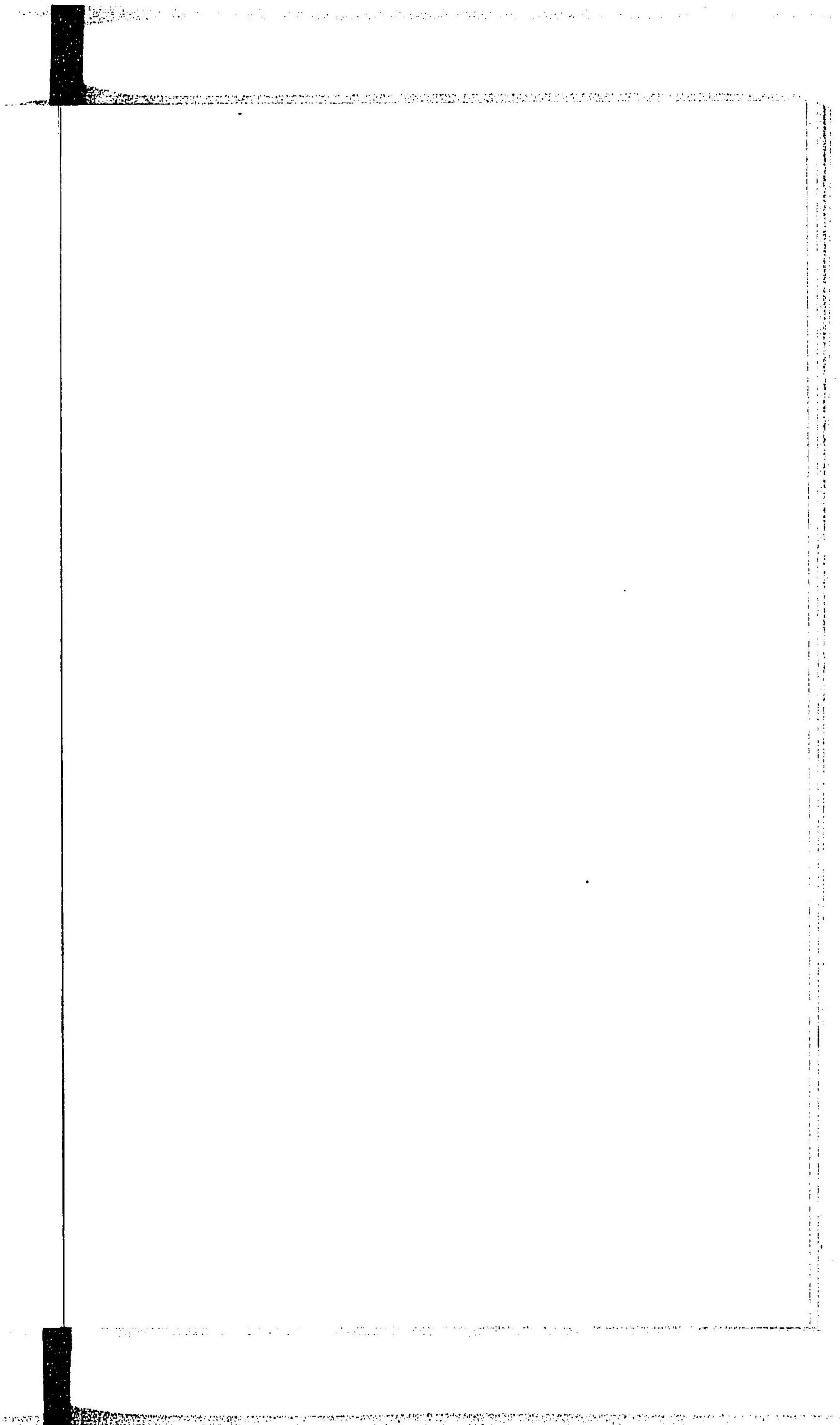
全壹冊 郵税金八錢  
定價金八十錢

獨逸 田畑梅次郎先生 共譯  
標正董先 氏原著  
ホツフマン氏

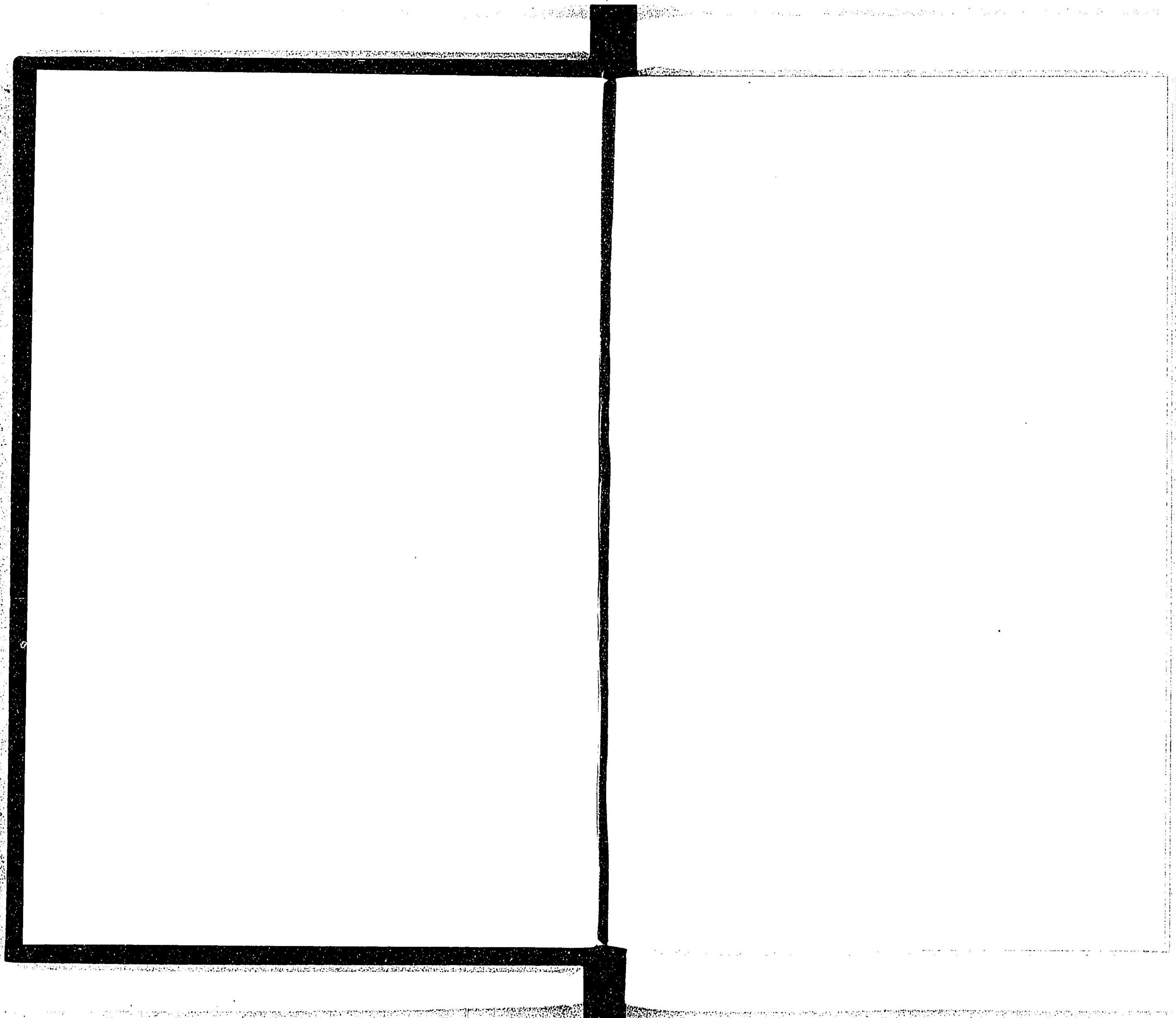




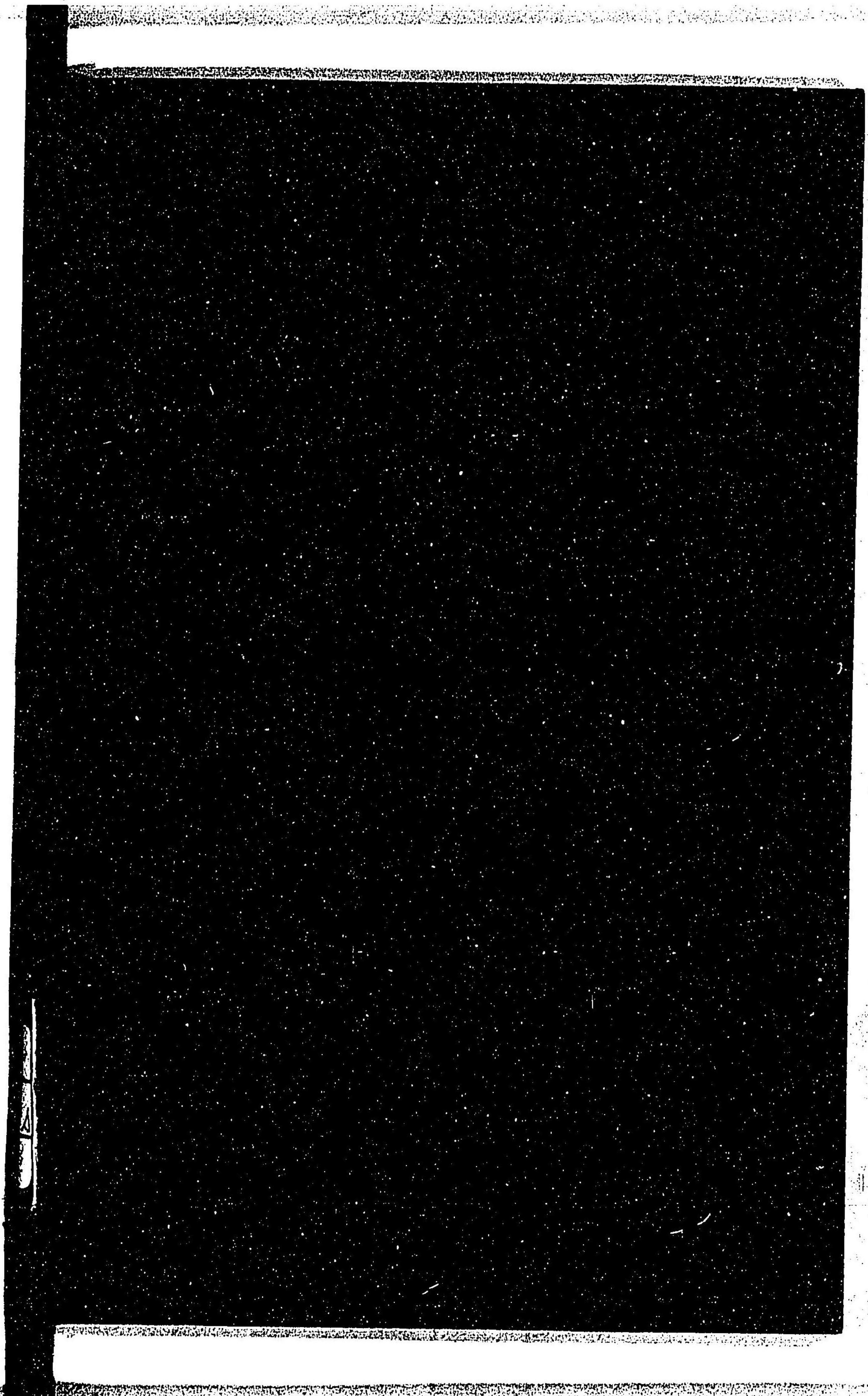














912.4  
Ti 238s  
H

088283-000-3

912.4-Ti238sH

巢林子評釈

藤井 紫影/著

M41

DBI-0116





